藪越遺跡 Ⅲ

やぶの　こし

2005年3月
長野県飯田市教育委員会

藪越遺跡 Ⅲ

2005年3月
長野県飯田市教育委員会

序

飯田市上郷地区は、飯田市街地の北に位置し、木曽山脈の麓から天竜川まで広がる大きな扇状地上に立地しています。

このような地形を利用して、私たちの祖先は生活を営み、その痕跡が遺跡として現代に残されてきています。これらは私達の地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のままで後世に伝えていくことが私たちの責務であります。

上郷地区は、県道・国道のバイパス道路整備も終了し、これに沿った場所から、住宅化や店舗の建設が急速に進みつつある地域です。今次調査箇所も、国道153号に沿った商工用地として利用されている一画にあたります。この一帯には、未調査の竪穴式石室が確認された溝口の塚古墳や、県史跡の前方後円墳の飯沼天神塚古墳をはじめ多数の古墳が集中する古代史上重要な地域であります。このため、関係各機関と協議の結果、工事実施に先立って発掘調査を行って、記録保存を図ることとなりました。

調査結果については本文に述べてあるとおりですが、今回の調査では、飯伊地区でも類例の少ない弥生時代中期後半の集落などが見つかり、当時の生活の様子が明らかになりました。調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料になると確信しています。

最後になりましたが、調査の実施に当たり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただきました㈲まるやま様、㈱しまむら様をはじめ、調査に関係されたすべての皆様方に深く感謝申し上げます。

平成17年３月

飯田市教育委員会
教育長　冨　田　豢　啓

例　言

1．本書は㈱しまむら上郷店移転に先立ち実施された、長野県飯田市上郷飯沼所在の埋蔵文化財包蔵地藪越遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、㈲まるやまからの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．調査は、平成15年度に現地作業、平成16年度に整理作業・報告書刊行を行った。

4．現地での調査は吉川金利・羽生俊郎・佐々木嘉和が担当し、整理作業は下平博行が担当した。

5．調査にあたり、基準点測量を株式会社ジャステックに委託した。

6．発掘作業・整理作業にあたり、遺跡番号としてYBN3396を一貫して用いた。遺構番号は、1次調査（平成2年度調査　上郷町教委　1991)、Ⅱ次調査（平成10年度調査　飯田市教委　2000）の成果を引き継いでいる。

7．遺構名称は以下の略号を用いた。
住居址・SB　土坑・SK　溝址・SD

8．本書の記載については、住居址・溝址・土坑・小柱穴の順とした。

9．土層観察については主に、小山正忠・竹原秀雄　1996　「新版標準土色帳」を用いた。

10．本書の執筆は下平が担当した。また、編集は調査員の協議により、下平が行った。

11．本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により下平が行った。

12．本書の遺構写真は吉川金利が撮影し、遺物は西大寺フォト　杉本和樹氏に委託した。

13．本書の遺構図の中に記した数字は検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。

14．本書に関連した出土遺物及び図面・写真類は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目　次

本文目次

序
例言
目次

第Ⅰ章　経　過
1　調査に至るまでの経過 …… 1
2　調査の経過 …… 1
3　調査組織 …… 3
4　調査位置・調査区の設定 …… 3
5　調査の概要 …… 3

第Ⅱ章　遺跡の環境
1　自然環境 …… 5
2　歴史環境 …… 7
3　藪越遺跡Ⅰ・Ⅱ次調査の概要と周辺遺跡 …… 8
(1)　1次調査 …… 8
(2)　2次調査 …… 8
(3)　周辺遺跡の調査 …… 8

第Ⅲ章　調査結果
1　基本層序 …… 9
2　弥生時代の遺構と遺物 …… 11
(1) 住居址 …… 11
① 住居址28（SB28） …… 11
② 住居址29（SB29） …… 11
③ 住居址30（SB30） …… 11
④ 住居址31（SB31） …… 12
⑤ 住居址32（SB32） …… 12
⑥ 住居址33（SB33） …… 12
⑦ 住居址34（SB34） …… 12
⑧ 住居址35（SB35） …… 13
⑨ 住居址36（SB36） …… 13
⑩ 住居址37（SB37） …… 13
(2) 溝址 …… 14
① 溝址17（SD17） …… 14
② 溝址18（SD18） …… 14
③ 溝址19（SD19） …… 14
④ 溝址20（SD20） …… 14
⑤ 溝址21（SD21） …… 14
(3) 土坑・小柱穴 …… 14
① 土坑08（SK08） …… 14
② 土坑09（SK09） …… 15
③ 小柱穴 …… 15
3　古墳時代の遺構と遺物 …… 15
(1) 住居址 …… 15
① 住居址20（SB20） …… 15
② 住居址21（SB21） …… 15
③ 住居址22（SB22） …… 15
④ 住居址24（SB24） …… 16
⑤ 住居址25（SB25） …… 16
⑥ 住居址26（SB26） …… 16
⑦ 住居址27（SB27） …… 16
(2) 溝址・小柱穴 …… 17
① 溝址12（SD12） …… 17
② 溝址13（SD13） …… 17
③ 溝址14（SD14） …… 17
④ 溝址15（SD15） …… 17
⑤ 溝址16（SD16） …… 17
⑥ 小柱穴 …… 18
4　奈良～平安時代の住居址 …… 18
① 住居址23（SB23） …… 18
5　遺構外出土遺物 …… 18

第Ⅳ章　総括
1　弥生時代中期の土器について …… 19
(1) 住居址29 …… 19
(2) 住居址30 …… 19

(3) 住居址34 …… 20
(4) 編年位置 …… 20
2 各時代の様相 …… 20
(1) 縄文時代 …… 21
(2) 弥生時代 …… 21
(3) 古墳時代 …… 21
(4) 奈良・平安時代 …… 21
(5) 中世 …… 21
引用参考文献
報告書抄録

挿図目次

挿図1 遺跡周辺図 …… 2
挿図2 基準メッシュ調査位置図 …… 4
挿図3 藪越遺跡位置図 …… 6
挿図4 基本層序 …… 9
挿図5 遺構全体図 …… 10

図面目次

図1 住居址(SB20・22・28・29) …… 23
図2 住居址(SB24～27) …… 24
図3 住居址(SB30・31・33) …… 25
図4 住居址(SB32・34・35) …… 26
図5 住居址(SB36) …… 27
図6 住居址・土坑(SB37、SK08・09) …… 28
図7 溝址(SD12～16) …… 29
図8 溝址(SD17～20) …… 30
図9 溝址(SD21) …… 31
図10 住居址出土遺物
(SB22・23・25・28・30) …… 32
図11 住居址出土遺物(SB24) …… 33
図12 住居址出土遺物(SB29・31・35・37) …… 34
図13 住居址出土遺物(SB34) …… 35
図14 住居址出土遺物(SB36) …… 36
図15 溝址出土遺物(SD12・13) …… 37
図16 溝址出土遺物(SD14・16～19) …… 38
図17 住居址・溝址・遺構外出土遺物 …… 39
図18 遺構出土石器 …… 40
図19 遺構・遺構外出土石器 …… 41

写真図版目次

図版1 遺跡 調査前全景(南から) …… 45
調査前全景(西から) …… 45
図版2 遺跡 住居址22 …… 46
住居址24・25 …… 46
図版3 遺跡 住居址30・31・33 …… 47
住居址30炉址 …… 47
住居址33炉址 …… 47
図版4 遺跡 住居址34 …… 48
住居址34炉址 …… 48
図版5 遺跡 住居址36 …… 49
住居址37 …… 49
図版6 遺跡 住居址35 …… 50
溝址12・13 …… 50
溝址16 …… 50
図版7 遺跡 溝址17 …… 51
溝址18 …… 51
溝址19 …… 51
図版8 遺跡 第一検出面全景(1) …… 52
第一検出面全景(2) …… 52
図版9 遺跡 第二検出面全景(1) …… 53
第二検出面全景(2) …… 53
図版10 遺跡 重機作業風景 …… 54
委託測量風景 …… 54
作業風景 …… 54
図版11 遺物 住居址24 …… 55
住居址28 …… 55
住居址29 …… 55
住居址30 …… 55
住居址34 …… 55
図版12 遺物 住居址34 …… 56
住居址37 …… 56
図版13 遺物 住居址36 …… 57
図版14 遺物 溝址12 …… 58

図版15　遺物　溝址13 …… 59
溝址14 …… 59
図版16　遺物　溝址17 …… 60
遺物　溝址18 …… 60
図版17　遺物　溝址19 …… 61
遺構外 …… 61
図版18　遺物　住居址22 …… 62
住居址30 …… 62
図版19　遺物　炉に転用された壷・甕 …… 63
図版20　遺物　住居址34 …… 64
住居址36 …… 64
溝址21 …… 64
図版21　遺物　溝址17 …… 65
溝址12・18・19・遺構外 …… 65
図版22　遺物　遺跡出土磨製石鏃
・磨製石鏃未製品 …… 66

第Ⅰ章　経　過

1　調査に至るまでの経過

平成15年3月7日付で飯田市上郷飯沼3409番地　有限会社まるやま　代表取締役　丸山要子より飯田市教育委員会に埋蔵文化財発掘の届出が提出された。開発内容は㈱しまむら上郷店の移転であった。当該地は埋蔵文化財包蔵地である藪越遺跡にあたり、何らかの保護措置が必要となった。そのため、㈱しまむらおよび設計担当である㈱エム・ティ・プランと飯田市教育委員会で埋蔵文化財の保護措置について協議を行った結果、先に試掘調査を行い、地下の状況及び遺構検出面の深度を把握することとなった。

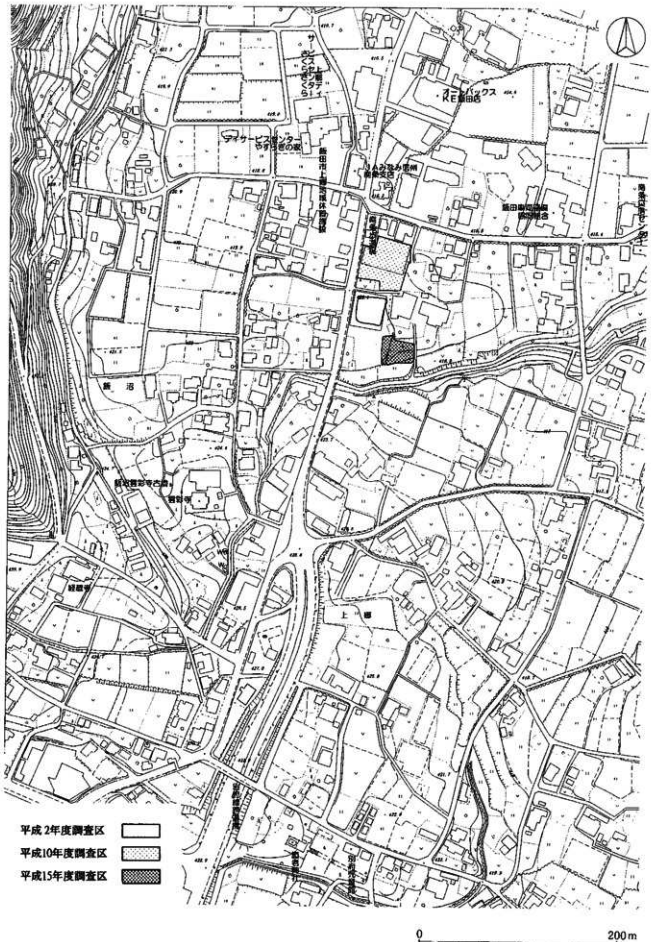
協議の結果を受けて平成15年6月23日に試掘調査を行った。保護対象地（建物建設部分）に3本のトレンチを設定したが、現駐車場の一部は使用中であったため試掘調査を行わなかった。試掘調査の結果、対象地南側は栗沢川側に急傾斜しており、遺構は存在しないと判断した。東側は後世の造作等によりかなり削平されていたが、弥生時代の住居址の床面が検出された。駐車場部分については試掘をしなかったものの、平成2年度（挿図1）に現しまむら上郷店を調査（第1次調査）した状況から古墳時代と弥生時代の2面の遺構検出面があることが想定され、対象地の南側を一部除く部分の保護措置が必要となった。このため開発側と保護側の双方で協議した結果、埋蔵文化財を保護すべき設計変更は不可能であるとの結論に達し、破壊されるおそれのある箇所について記録保存を図ることとなった。

2　調査の経過

試掘調査及び協議の結果を踏まえて、平成15年12月2日から現地での発掘調査を開始した。試掘結果から調査区東側については古墳時代遺構検出面が削平されていることがわかったため、東側は地山（黄褐色砂質土）まで、西側については1次調査での古墳時代遺構検出面までそれぞれ重機によって表土剥ぎを行った。表土剥ぎが終了した12月8日から作業員による遺構検出・掘削および委託による基準点測量を行い、順次遺構測量作業・写真撮影を行い、同月25日に東側及び西側古墳時代遺構検出面の調査を終了した。

平成16年1月6日に西側の弥生時代遺構検出面まで重機により掘り下げ、翌日より作業員による遺構検出・掘削、委託による基準点測量、遺構測量作業・写真撮影を行い同月20日に現場での調査を終了した。以後出土遺物・測量図・写真等の整理、遺構分布図の作成を行った。

平成16年度は、出土遺物の整理作業・報告書作成作業を行う事となった。4月26日より飯田市考古資料館において出土遺物の水洗い・注記・接合・復元作業・遺物実測・図版作成を行い、12月には委託遺物写真撮影を実施した後、報告書版組みなどを経て本報告書作成にあたった。



挿図1　遺跡周辺図

3　調査組織

(1) 調査団

調査主体者　飯田市教育委員会教育長　冨田泰啓

調査担当者　発掘調査（平成15年度）　吉川金利　羽生俊郎　佐々木嘉和
　　整理作業（平成16年度）　下平博行

作業員　木下貞子　木下義男　小島廉夫　瀬古郁保　竹本常子　田中博人
　　中平けい子　仲村　信　中山敏子　樋本宣子　福沢トシ子　松下省三
　　柳沢謙二　小池千津子　小平まなみ　森藤美智子　横　千賀子

(2) 指　導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

(3)　事務局

飯田市教育委員会

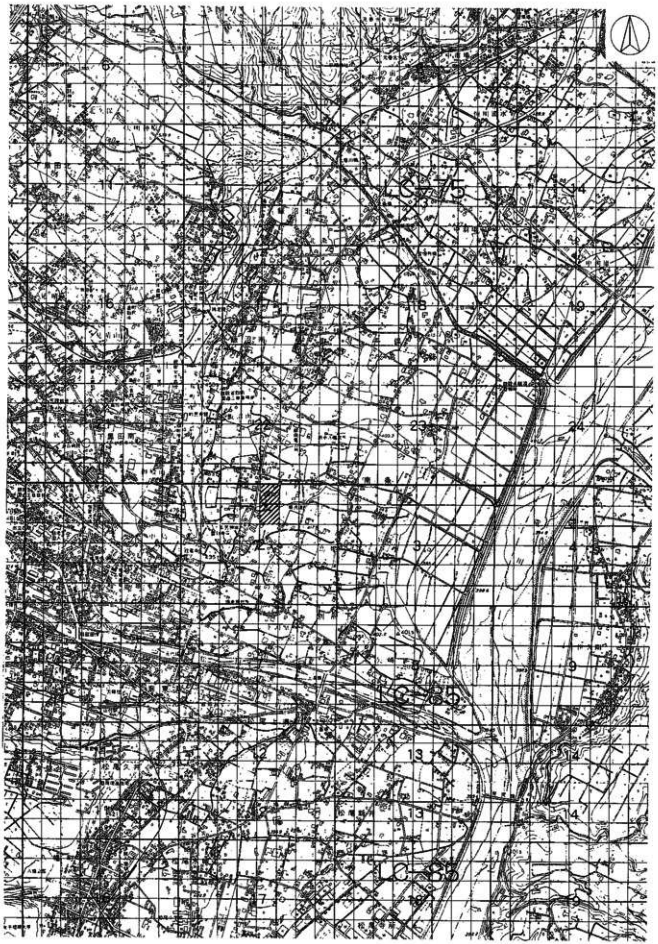
教育次長　尾曽幹男
　生涯学習課長　小林正春
　文化財保護係長　吉川　豊
　文化財保護係　馬場保之・澁谷恵美子・吉川金利（～平成15年度）・羽生俊郎（～平成15年度）
　　佐々木行博・下平博行（平成16年度～）・坂井勇雄（平成16年度～）

4　調査位置・調査区の設定

遺跡における発掘調査位置は、日本測地系である国土基本図の区画、Ⅷ-LC85-02（社団法人日本測量協会　1969「国土基本図図式　同適用規定」参照）に位置し（挿図2）、グリット設定は飯田市埋蔵文化基準メッシュ図（日本測地系）に基づいて、㈱ジャステックに委託実施した。

5　調査の概要

今次調査区は飯田市上郷3396・3305番地の現状農地・駐車場である（挿図1）。試掘調査の結果、遺構が確認された箇所を中心に、およそ1057㎡を調査対象とした。遺構検出面は2面あり、確認された遺構（挿図5）は弥生時代中期後葉～後期の住居址10軒・溝址5条、古墳時代住居址7軒・溝址4条・奈良時代1軒で、遺物は弥生時代中期後葉～後期の土器、古墳時代後期の土師器・須恵器が主体となった。



挿図2　基準メッシュ調査位置図

第Ⅲ章　遺跡の環境

1　自然環境

飯田市は伊那山脈と木曽山脈に挟まれた伊那盆地（通称　伊那谷）の南端に位置し、盆地の中央には天竜川が南流する（挿図３）。

伊那谷の地形は、山脈の形成に関わる断層地塊運動によって成立した盆地や段丘とによって構成された段丘地形であり、さらに山塊からの扇状地や天竜川の支流群の浸食によって形成された田切地形と呼称される河岸段丘とが組み合わさり、より複雑な地形を生み出している。この段丘は、主に御嶽山の火山灰土の堆積を基準にし、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱの５段階に編年されている（下伊那地質誌編集委員会　1978）。

藪越遺跡の所在する飯田市上郷地区は、飯田市北部、市街地からは北東２㎞に位置する。木曽山脈の支脈、通称野底山塊の標高1,500ｍを最高点に、飯田松川が天竜川に合流する標高380ｍ程に至るまでの間に広がり、その比高差は1,200ｍ程になる。北東は飯田市座光寺地区、東は天竜川を挟んで下伊那郡喬木村、南は松川を挟んで飯田市松尾地区と接する。

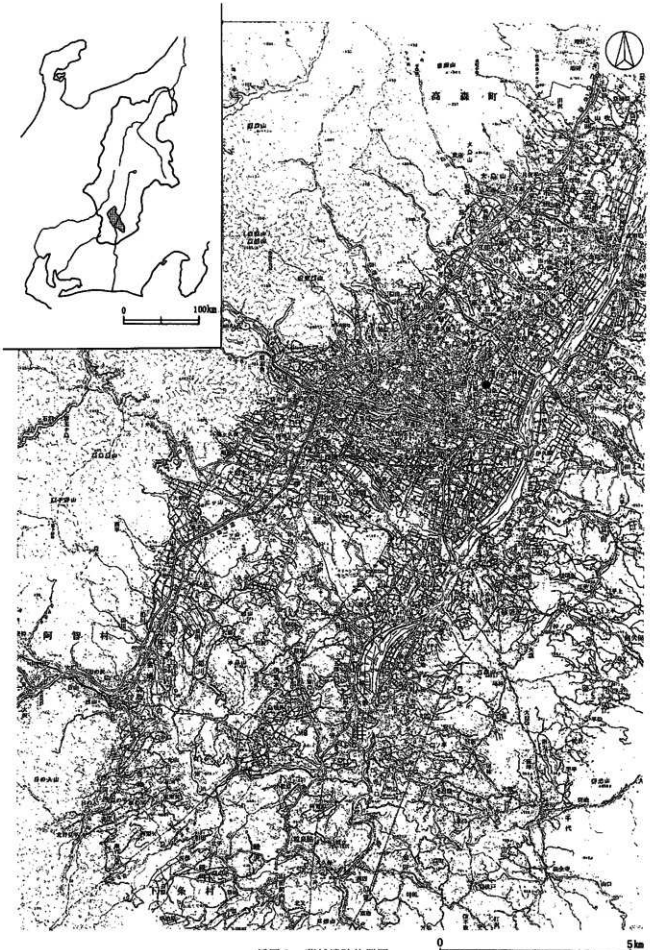
地区の北西端は、広く野底山塊に占められるが、山間部を除く地形は、標高500～650ｍ前後のローム層に覆われた台地である高位段丘に立地する上郷柏原地籍が最も西側に位置し、地区内を南北にのびる断層によって形成された比高差50ｍにも及ぶ段丘崖を境とし、地域では俗に上段（うわだん）と下段（しただん）と呼称し区分されている。

上段は洪積層の中位段丘及び低位段丘Ⅰに、藪越遺跡の所在する下段は沖積層の低位段丘Ⅱにそれぞれ比定されている（下伊那地質誌編集委員会　1978）。下段の低位段丘Ⅱは天竜川に最も近い南条面（海抜389～405ｍ）、別府面（407～418ｍ）、飯沼面に３区分されている。

上段には上郷黒田地籍が、下段には上郷別府・飯沼地籍がある。段丘崖下を中心に湧水や地下水が豊富である。このため、かつての下段は典型的な水田地帯であったが、現在は、国道153号周辺を中心に、住宅地や商工用地としての利用が著しい。

気候面でみれば、平均気温は13℃、年間降水量は1,600㎜程度で、温和な土地柄と言える。特に低位段丘Ⅱ一帯は、南北にのびる段丘崖によって冬の西風から守られる格好になっていることも温暖な気候の要因の一つに挙げられる。

藪越遺跡は上郷地区下段の低位段丘Ⅱの別府面に所在する。南側が比高差４～８ｍを測る栗沢川の侵食谷で、北側は旧河道と推定される浅い侵食谷に囲まれた東西に細長い舌状台地状の微高地の基部付近に立地している。北側には北浦遺跡が隣接し、栗沢川をはさんで南側には高屋遺跡が所在する。南西側は県史跡の飯沼天神塚古墳、未調査の竪穴式石室が確認された前方後円墳の溝口の塚古墳など多数の古墳が所在する市内有数の遺跡や古墳の集中地帯である。これらの遺跡から縄文時代以降現在に至るまで連続的に生活空間として利用されてきたことが窺われる。このように豊富な湧水や生産地に恵まれたこの地が、集落を営むのに絶好な自然環境であることを示していよう。



挿図3　薮越遺跡位置図

2　歴史環境

上郷地区最古の遺跡は、姫宮遺跡・柏原遺跡であり、断片的ではあるが縄文時代草創期の土器・石器が確認されている。縄文時代早期になると八王子遺跡・西浦遺跡・黒田大明神原遺跡等で遺物が出土しており、西浦・黒田大明神原遺跡では押型文期の住居址が確認されている。前期にはいると遺跡数は増加し、上段の中位段丘を中心に遺構・遺物が出土している。しかしながら低位段丘面でも、別府中島遺跡・矢崎遺跡で、諸磯期の住居址が確認されており、天竜川の氾濫源近くまで生活域が広がったことを示唆している。また、黒田大明神原遺跡では、前期前葉中越式期の集落と共に、大型建物址も確認されており、拠点的な集落も形成されていたと推定される。

縄文時代中期になると黒田大明神原遺跡で拠点的な大集落が形成されているほか、見城恒外遺跡・平畑遺跡・栗屋元遺跡・増田遺跡・垣外遺跡など地区全域にわたり遺跡数が増加する。

一方、縄文時代後期にはいると遺跡数は極端に減少し、日影林遺跡で遺物が出土するものの、明確な遺構は確認されていない。また、縄文晩期も状況は変わらず、遺跡数は少ないものの、下段の矢崎遺跡で東海系の条痕文系土器・在地系の氷式が出土しており、弥生時代への移行期の遺跡として注目されている。また、黒田大明神原遺跡では、氷式の甕が埋設された甕棺墓が確認されている。

弥生時代にはいると、水稲栽培を経済の基盤とする新しい文化が形成され、弥生時代後期には、下段で丹保遺跡・上段では垣外遺跡・高松原遺跡等大規模な集落が形成される。しかし、上段の遺跡では集落規模の小さい例が多く、住居址が疎に分布し、遺物の出土量も極めて少ない。こうした事態は経済基盤となる稲作農耕の形態差から生まれると推定されている。

古墳時代の上郷地区は、古墳36基が確認されており、そのほとんどが別府の低位段丘面に位置している。平成8年度、国道153号バイパス建設工事に先立ち、溝口の塚古墳の発掘調査が行われた。溝口の塚古墳は、約50ｍの前方後円墳で、未盗掘の竪穴式石室が調査された。石室内からは三角板鋲止短甲・横矧板鋲止短甲・衝角付冑・鉾・刀剣類などの豊富な武具が確認された。付近には円墳・方形周溝墓・馬埋葬施設などの弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓群が多数調査されている。

奈良・平安時代になると堂恒外遺跡に代表され、古代伊那郡衙の恒川遺跡の工房址と推定される住居址群や掘立柱建物址等が確認されている。住居址内からは轡・鐙の羽口・漆痕の見られる坏が出土しており、この点から堂恒外遺跡は郡衙に付属する官人・工人の集落である可能性が高いと言える。

中世になると飯沼城・古城・見晴山城など4箇所の城跡が確認されている。いずれの城跡も戦国時代に築造されたものと推定される。この中で、飯沼城は京都醍醐寺理性院の厳助僧正の『信州下向記』(天文2年　1533年)に現れ、厳助僧正が文永寺を訪れた際、飯沼城主坂西伊予守弟民部小輔の接待を受けたとされている。主郭には現在でも高さ3ｍほどの壮大な土塁が巡るものの、周辺は開発が進み、堀等の諸施設が破壊されつつある。

近世には、伊那谷各地で人形芝居が流行し、上郷地区でも下黒田諏訪神社で現代まで引き続き上演されている人形芝居がある。下黒田諏訪神社の人形芝居専用の舞台は、国の重要民俗有形文化財に指定されており、住民の精神活動の拠り所として現在でも重要な位置を占めている。こうした歴史的背景のある上郷地区は、文化・文化財が良好に伝承された地域の一つといえよう。

3　藪越遺跡Ⅰ・Ⅱ次調査の概要と周辺遺跡

(1)　Ⅰ次調査（上郷町教委 1991）

Ⅰ次調査は、店舗建設に先立ち平成2年に実施された。調査地点は今次調査区北側に隣接する。遺構検出面は2面あり、上面から中世の住居址1軒、古墳時代後期の住居址3軒、古墳時代中期の溝址6条、下面から弥生時代後期の住居址が5軒検出されている。

中世の住居址は焼失家屋で、大量の炭化米・治平元寶・黄瀬戸椀等が出土している。出土した炭化米は、自然化学分析の結果、日本型の短粒型とインド型の長粒型の2種類が混在し栽培されていたことが指摘されている。

古墳時代中期には自然流路と推定される溝址が確認されているが、その多くから多量の土師器高坏、小型壺等が出土しており、集落内の生活用水路の可能性が指摘されている。また、カマドをもつ古墳時代後期の住居址は、調査区の南側に集中しており、土器の様相からほぼ同一の時期に営まれた集落の北端部を示す可能性が指摘されている。

弥生時代後期の集落は、住居址が近接もしくは重複して検出され、出土遺物から後期全般にわたる集落の可能性が指摘されている。また、上段の集落が1時期もしくは2時期程度で廃絶してしまうのに対し、下段の集落が広い可耕地を生産基盤とし、長期間存続し、拠点的な役割を果たしていた可能性が指摘されている。

(2)　Ⅱ次調査（飯田市教委 2000）

Ⅱ次調査は、店舗建設に先立ち平成10年に実施された。調査地点はⅠ次調査地点の北側に隣接し、今次調査区からは北西に約50ｍ程度離れている。古墳時代検出面は削平されていたため不明であるが、下層の検出面から弥生時代後期後半から終末期にかけての住居址10軒・建物址3棟が検出されている。住居址の分布は南端ほど密になり、北端では掘立柱建物址が確認されている。このため、当該期集落の北端を示している可能性がある。また、本遺跡では断片的な遺物のみであった縄文時代の遺構がはじめて検出され、土壙墓内部から縄文時代中期終末～後期の深鉢が出土している。

(3) 周辺遺跡の調査

藪越遺跡の周辺では国道153号飯田バイパス建設に先立ち、発掘調査が実施されている。このうち、栗沢川を挟んで南側に近接する高屋遺跡・宮垣外遺跡では弥生時代・古墳時代・奈良平安時代・中世に至る墳墓群が確認されている。弥生時代から古墳時代にかけては前方後円墳である溝口の塚古墳や、円墳・円形周溝墓・方形周溝墓・土壙墓・馬葬墓等も検出されている。特に、溝口の塚古墳は二重周溝を有する前方後円墳であることが確認され、周溝を含めた全長は65.5ｍと推定されている。未調査の竪穴式石室からは三角板鋲留短甲・横矧板鋲留短甲をはじめ剣・直刀等の武具を中心とした遺物が出土し、遺物の様相から5世紀中葉から後葉に比定されている。こうした各時代にわたる墳墓の存在から、遺跡が近隣に集落を構えた集団による、最上位から下位までの墓域であり、集団にとって特別なエリアとして位置づけられていた可能性が指摘されている。

第Ⅲ章　調査結果

1　基本層序

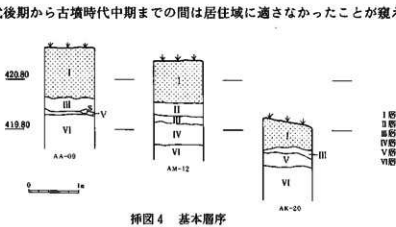
今次調査区は、平成２年度調査区（Ⅰ次調査）、平成10年度調査区（Ⅱ次調査）の南東側に近接する。当該地周辺の地形は、西から東に向かって緩やかに傾斜し、南側は栗沢川河床に向かって急激に落ち込む。このため、今次調査区は平成２年度調査区より若干低位に位置する。遺跡は前述のとおり沖積地に立地するため、僅かな場所の違いで層位に変化が見られ、遺跡内での基本層序は統一されていない。

平成２年度の調査（Ⅰ次調査）では、地表から基盤となる黄色砂質土までの間が７層に分層されており、２層の暗灰褐色土が中世から奈良時代、４層の明褐色砂質土までが古墳時代、基盤とされる黄色砂質土が弥生時代の検出面に比定されている（上郷町教委 1991）。

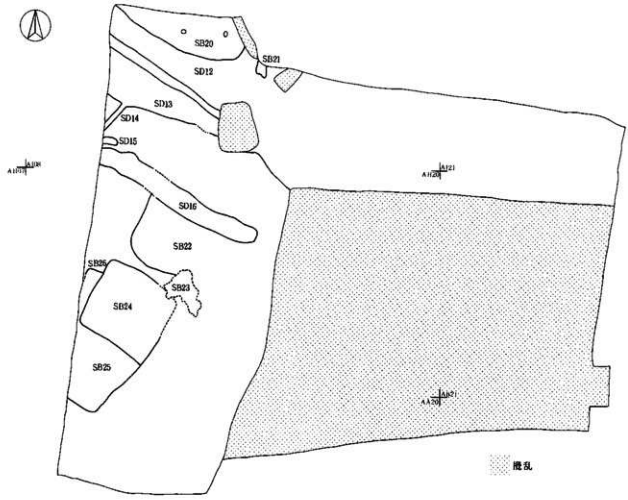
平成10年度調査（Ⅱ次調査）は、平成２年度調査区より１ｍ程度深く掘削が行われていたため、古墳時代包含層が残存せず、弥生時代検出面である８層（平成２年度の黄色砂質土に対比される）中心の調査を行っている。この折の調査では、弥生時代住居址が検出面である８層より上面の６層から掘りこまれていることが確認されている（飯田市教委 2000）。

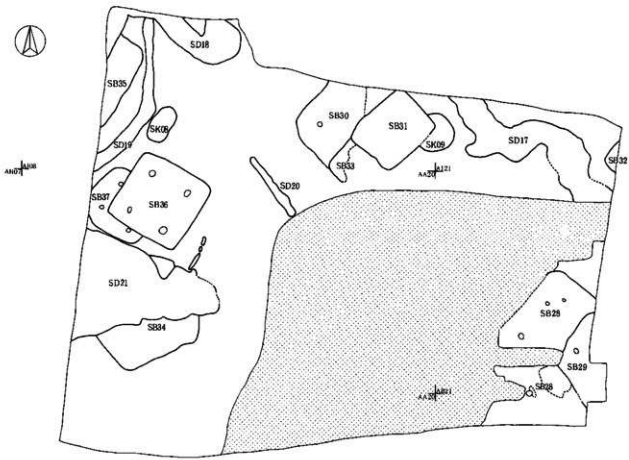
今次調査では、調査区南西側AA09・北西側AM12・北東側AK20の３箇所で土層調査を行った（挿図４）。その結果調査区内で均一な土層堆積は見られなかった。調査時の古墳時代検出面はⅣ層であるが、AM12ではSB 20がⅡ層上面から掘り込まれていることが観察されている。但し、Ⅱ層はAM12周辺でのみ確認されている。また、Ⅵ層が弥生時代検出面であり、上層のⅤ層からも遺物は出土している。

今次調査を含めた３回の調査から各地点の層位を対比させると、古墳時代と推定される今次調査区Ⅱ～Ⅳ層が一次調査の暗灰褐色土～明褐色砂質土に、弥生時代と推定されるⅤ層～Ⅵ層が、一次調査の黒褐色砂質土～黄色砂質土、二次調査の６層～８層にそれぞれ相当すると考えられる。また、いずれの地点からも縄文時代の遺物が弥生時代検出面から確認されている。こうしたことから、今次調査区のⅤ・Ⅵ層が縄文～弥生時代の生活面で、Ⅱ～Ⅳ層が古墳時代～中世の生活面であると推定される。また、調査時の検出面であるⅣ・Ⅵ層はいずれも土性が砂土で土壌化が見られない点から、洪水等の要因で短期間に堆積したこと推定される。これに対し、それぞれの生活面は土壌化が見られ、安定した時期の存在が予想される。いずれにしても土層観察からは、当該地周辺が洪水等の要因で、弥生時代後期から古墳時代中期までの間は居住域に適さなかったことが窺える。



挿図４　基本層序





挿図5　遺構全体図（上：第一検出面　下：第二検出面）

0　5m

2　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、第二検出面であるⅥ層を中心に、住居址10軒・溝址4条・土坑2基および小柱穴多数が確認されている（挿図5）。時期的には弥生時代中期後半～終末と推定される住居址が9軒、後期後半の住居址が1軒である。溝址は中期後半～後期の遺物が混在しているものの、中期後半の住居址との切り合いが認められるものもあり、住居址より新しいと推定される。しかしながら調査区南東側を中心に、調査区のほぼ半分が後世の掘削による攪乱を受けているため、遺構の形態など不明なものも多い。

(1) 住居址

① 住居址28（SB 28）（図1・10　写真図版11）

AC25グリットを中心に検出された。東側及び南側が調査区外に、西側の大半が攪乱により破壊され、残存部にも部分的に攪乱が見られる。また、東側は住居址29により破壊されている。このため住居址の壁は北東側に2m程度残存するのみで住居址の平面形・規模等は不明である。

床面には部分的に貼床が見られ、全体的に堅く締められている。住居址に付属すると思われる柱穴は4本確認されているが、配置等は不明である。炉址は残存する北東側壁から南寄りに見られ、床面を直径40㎝程度円形に堀くぼめた中に、壷の胴下半部を埋めた土器埋設炉である。土器の内部は炭化物が多量に含まれ、周辺には焼土が顕著に見られた。

覆土中及び床面からの出土遺物は少なく、炉に転用された壷と、器台もしくは高坏脚部の一部及び器種不明の土器を図示した。壷（図10-13）は、無文の胴下半部である。胎土に最大9㎜程度の長石粒を多量に含む。住居址30の埋設炉に使用された壷上半部に焼成・色調・胎土が極めて近似しており、同一個体の可能性が考えられる。また、覆土中からは縄文時代中期初頭の土器片が混入して出土している。

② 住居址29（SB 29）（図1・12　写真図版11）

AC25グリットを中心に検出された。住居址の大半が調査区外にかかるため、全体の1/3程度を調査した。住居址28を切り、西隅が攪乱により破壊されている。規模等の詳細は不明であるが、平面形は隅丸方形に近い形態と推定される。検出面からの堀込みが浅いため、南壁は不明な点が多い。柱穴はP1が確認されているが、浅く、配置等不明である。床面は全体的に固く締められている。炉址は南壁から北寄りにみられ、床面を直径80㎝程度円形に堀くぼめた中に、底部を欠いた甕の胴部を埋めた土器埋設炉である。土器の内部及び掘り込み内には炭化物が多量に見られた。

覆土中及び床面からの遺物は少なく、図示できたものは少ない。炉に転用された壷の胴部（図12-1）甕（2）が見られるが、小破片が多い。

③ 住居址30（SB 30）（図3・10　写真図版3・11）

AJ17グリットを中心に検出された。北側は調査区外へ延び、南側は住居址31・33に切られ、一部攪乱により破壊されたため、全体の1/2程度が調査されたに過ぎず、規模・平面形等は不明である。検出面からの掘り込みは浅く、壁高は約20㎝程度である。柱穴はP1が確認されたほか、極浅い小柱穴

が7基みられた。床面は全面に貼床が見られ、堅く締められている。炉址は西壁中央から東寄りに見られ、床面を直径35㎝程度円形に掘りくぼめた中に、口縁部と底部を欠いた壷を逆位に埋めた土器埋設炉である。土器内部及び周囲には炭化物・焼土が見られた。

覆土中及び床面からの遺物は極めて少なく、図示したものは少ない。炉に転用された壷(図10-16)、甕(17)が見られるが、小破片が多い。また、覆土中には縄文土器も混在する(図17)。

④ 住居址31(SB 31)(図3・12　写真図版3)

AJ19グリットを中心に検出された。北隅が調査区外へ延び、南壁の一部は撹乱により破壊されている。住居址30・33、土坑09を切る。平面形は4.4×3.65ｍの隅丸長方形で、主軸はN-135°-Wを示す。検出面からの掘り込みは約30㎝で、床面は全体的に堅く締められている。柱穴は4基検出したが、いずれも浅く、配置も規則性が無い。炉址は南壁中央からやや北寄りに見られ、直径30㎝程度の円形の掘り込みと、直径20㎝程度の掘り込みが見られるが、新旧関係は不明である。前者には、掘り込み内を取り囲むように土器片が見られることから土器埋設炉の可能性がある。

覆土中及び床面からの遺物は極めて少なく、甕の底部(図12-6)など見られるが、細片が多く図示できるものは少ない。

⑤ 住居址32(SB 32)(図4)

AI26グリットを中心に検出された。住居址の西隅が検出されたのみで、ほぼ全体が調査区外へ広がるため規模・平面形は不明である。床面は全面に堅く締められている。

覆土中及び床面からの遺物は極めて少なく、図示できるものはない。

⑥ 住居址33(SB 33)(図3　写真図版3)

AJ18グリットを中心に検出された。東側が撹乱及び住居址31により破壊されたため西隅周辺のみが検出された。他遺構との重複関係は、住居址30を切り住居址31に切られる。規模・平面形等詳細は不明であるが、残存部の床面は堅く締められている。

覆土中及び床面からの遺物は極めて少なく、図示できるものはない。

⑦ 住居址34(SB 34)(図4・13・18　写真図版4・11・12・20)

AC11グリットを中心に検出された。ほぼ北半分が溝址21により破壊されているため、規模・平面形等は不明である。検出面からの掘り込みは浅く、壁高は約20㎝程度である。柱穴はP1～P4が確認されたほか、小柱穴が4箇所みられた。床面は不明確で、一部に堅く締められた箇所が見られる。炉址は西壁中央から東寄りに見られ、床面を直径40㎝程度円形に掘りくぼめた中に、口縁部と底部を欠いた甕を埋めた土器埋設炉である。

覆土中及び床面からの遺物は少ない。炉に転用された甕(図13-12)、南壁ほぼ中央付近で投棄された状態で出土した甕(1)、壷(5・6・8～10)、鉢(2)が見られるが、小破片が多い。

石器には硬砂岩製の打製石器(図18-1)、有抉石器(3)、石製紡錘車(6)、磨製石鏃未製品(4・5)台石(2)が出土している。

⑧ **住居址35**（SB 35）（図4・12　写真図版6）

AL11グリットを中心に検出された。南側は調査区外へ広がるため、住居址の東隅周辺の1/3が調査されたのみである。また、北壁は一部溝址18により切られている。このため、全体の規模・平面形等は不明である。検出面からの掘り込みは浅く、壁高は約24㎝程度である。柱穴はP1が確認されたほか、極浅い小柱穴が1箇所検出されたのみで柱穴の配置等は不明である。床面は全面が堅く締められている。

覆土中及び床面からの遺物は極めて少なく、甕の胴部（図12-8）や布目痕のある甕の底部（9）など見られるが、図示しうるものは少ない。

⑨ **住居址36**（SB 36）（図5・14・18　写真図版5・13・20）

AH12グリットを中心に検出された弥生時代後期後半の住居址である。5×5ｍの隅丸方形を呈し、主軸はN-32°-Eを示す。他遺構との重複関係は、住居址37を切っている。住居址の外側には、幅20㎝の極浅い溝が1ｍ程度検出されており、雨落溝的な痕跡の可能性がある。また住居址の覆土中には多量の礫が投棄された状態で混入していた。

住居址は、検出面からの掘り込みが約50㎝と深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。全面に貼床がみられ、堅く締められている。柱穴はP1～P15までを検出したが、主柱穴はP1～P4と考えられる。また、P6、P7は間仕切り的な性格と推定される。出入り口と推定される北壁直下には一部周溝が検出されたが全周していない。また、北壁に接して検出されたP5および周辺の小柱穴は、貯蔵穴の可能性がある。炉址は、住居址の東側P1とP2の中間に検出された90×77㎝の楕円形の地床炉で、西側縁に長さ20㎝程度の細長い炉縁石が配置されていた。

貼床下の調査では、住居址中央やや東寄りに地床炉が検出された。このため、住居址の拡張あるいは床の貼替が行われたと考えられるが、旧炉に対応する柱穴は検出されなかった。

遺物は床面に少なく、主に覆土上層を中心に出土しているが、弥生時代中期後半から後期後半までの遺物が混在している。器種には甕・壷・高坏が見られる。甕（図14-2）は、底部を欠き、胴部上半に最大径を有する。口縁部は折れ曲がるように強く外反する。胴上部に櫛描波状文と斜走短線文が施されている。この他に無文の小型の甕（1）や、頸部に調整痕の残る小型の甕（2）が出土している。いずれも口縁部が強く外反する。石器には硬砂岩製の有肩扇状形石器（図36-8）・有抉石器（7）・打製石包丁（9）が見られる。

⑩ **住居址37**（SB 37）（図6・12・18　写真図版5・12）

AH10グリットを中心に検出された。東側で全体の2/3を住居址36によって切られたため、全体の1/3程度が調査されたに過ぎないが、推定規模4.3×4.2ｍの隅丸方形と考えられる。検出面からの掘り込みは他の住居址に比べやや深く、壁高は約32㎝程度である。柱穴はP1～P4が確認され、内P4はSB 36の貼床下から検出された。また、極浅い小柱穴が3箇所みられた。床面は全面に貼床が見られ、堅く締められている。炉址は確認されていない。

床面からの遺物の出土は無く、大半が覆土中から見られた。いずれも破片であるが、甕（図12-16）、壷（15）が見られる。また、甕の底部（18）には布目痕がみられる。石器には硬砂岩製の小型の横刃形石器（図18-11）、打製石器（10）が出土している。

(2) 溝址

① 溝址17 (SD 17) (図8・16・18　写真図版7・16・21)

AI23グリットを中心に検出された。南側は用地外に連続する。部分的に撹乱が見られるが、調査区内での全長は12mで、最大幅は2.2m、深さ0.4mを測る。断面形は逆台形を示し、底面はほぼ平坦な部分が多い。

遺物(図16-10～23)は、弥生時代中期後半～後期の土器片が主体となるが、縄文土器片も少数見られる。また、打製石包丁・磨製石鏃・磨製石鏃未製品等の石器(図18-15～18)も出土している。

② 溝址18 (SD 18) (図8・16・18　写真図版7・16)

AM14を中心に検出された。北側及び西側が調査区外に連続する。調査区内での全長は8.4mで、最大幅は1.6m、深さ0.76mを測る。断面形は逆台形となり、部分的にピット状の落ち込みが見られる。

遺物(図16-24～37)は、弥生時代中期後半～後期の土器が主体となり、甕・壺・外来系の高坏が見られるが、いずれも破片のみである。また、磨製石鏃未製品(図18-19)も出土している。

③ 溝址19 (SD 19) (図8・16・18　写真図版7・17)

AJ11を中心に検出された。北側及び南側は調査区外に連続する。溝址18と重複関係にあり、これを切っている。調査区内での全長は10.7mで、最大幅は1.0m、深さは0.94mを測る。断面形は逆台形で、北側部分には部分的に細長い落ち込みが見られる。

遺物(図16-38～43)は、弥生時代中期後半の土器が主体であるが、いずれも小破片である。また、磨製石鏃未製品(図18-20・21)が2点出土している。

④ 溝址20 (SD 20) (図20)

AH15を中心に検出された。全長4.6mで、最大幅は0.65m、深さは0.15mと浅い。断面形は逆台形で、底面は全体的に平坦である。遺物は少なく、図示しうるものはない。

⑤ 溝址21 (SD 21) (図9・17・19　写真図版21)

AE11を中心に検出された。西側が調査区外へ連続する。住居址34と重複関係にあり、これを切っている。調査区内での全長は8.8m、最大幅7.25m、深さ0.76mで、断面形はU字形に近い。東側先端部分は細く萎み、底面にはピット状の落ち込みが多数見られる。覆土は砂と壌質砂土とが互層となっており、自然流路の可能性が高い。

遺物(図17-1～4)は弥生時代中期後半～後期の土器が主体となるが、いずれも破片のみである。また、打製石包丁3点(図19-4～6)、磨製石鏃未製品2点(8・9)、打製石鏃1点が出土している。

(3) 土坑・小柱穴

① 土坑08 (SK 08) (図6)

AJ12を中心に検出された。長径2.38×短径1.3mの楕円形を呈し、底面は北側半分が一段深くなる。土坑の重複の可能性もある。遺物は出土しなかった。

② 土坑09（SK 09）（図6）

AI20を中心に検出された。直径2.4m、深さ1.3mの円形に近い形状を呈し、断面形はU字状を成す。底面まで深く、覆土は単層の粗い砂のため崩れやすく、危険防止の観点から南側半分のみ調査を行った。

③ 小柱穴

調査区全域から小柱穴が20基検出された。不定形な穴が多く、深さも10～30cmと幅がある。規則的な配置も見られず、遺物も極少量な例がほとんどである。不定形で底面に凹凸のある穴は風倒木痕の可能性があるが、詳細は不明である。

3　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、第一検出面であるⅣ層を中心に、住居址7軒・溝址5条および小柱穴多数が検出されている。時期的には出土遺物から古墳時代後期と推定されるが、弥生時代検出面と同様に、広い範囲で後世の掘削による攪乱を受けており、遺構の形態が不明なものや遺物が出土していない住居址も多い。また、溝址の多くは第二検出面まで掘りこまれているものが多く、その大半から古墳時代以外の遺物が出土している。

(1) 住居址

① 住居址20（SB 20）（図1）

AM13グリットを中心に検出された。用地境の北壁土層精査中に確認されたため、平面形・規模は不明である。土層中には貼床およびカマドが確認され、隣接する溝址12の時期からも溝址12を切っていると推定される。柱穴はP1・P2が検出された。北壁中から確認されたカマドは、石芯粘土カマドと考えられるが、詳細は不明である。

遺物は出土していない。

② 住居址21（SB 21）

AL15グリットを中心に検出された。検出層位から古墳時代と推定される。周囲を攪乱により破壊されているため、およそ60cm四方の貼床が検出されたのみである。このため平面形・規模等不明である。

遺物は出土していない。

③ 住居址22（SB 22）（図1・10　写真図版2・18）

AG12グリットを中心に検出された。貼床の一部とカマドが確認されたのみのため平面形・規模等は不明である。北側で貼床が溝16上にあるため、溝址16を切り、南側で住居址23に切られると考えられる。カマドは燃焼部のみで、形態は不明である。

遺物は土師器坏・高坏・須恵器蓋杯が出土している。貼床下からは弥生時代土器片が少量出土して

いる。土師器坏（図10-1）は坏部の外面下部に稜が見られ、口径はおよそ10cmと小さい。高坏脚部（2）は柱状に近い形態と推定される。須恵器蓋杯（3）の身は全体の1/10程度が残存するのみである。口縁部の立ち上がりは短く内傾する。

④ 住居址24（SB 24）（図2・11　写真図版2・11）

AE11グリットを中心に検出された。東隅周辺をSB 23により破壊されている。検出面からの掘り込みは浅く、8cm前後である。床は全体的に軟弱であるが、一部に貼床が見られた。平面形は4.95×4.7mの隅丸方形を呈し、主軸はN-59°-Wを示す。柱穴はP1～P5まで検出したが、不規則な配置で主柱穴は特定できない。西壁のほぼ中央付近にカマドが検出されたが破壊されており、周囲に構築材と推定される礫が散乱していた。

遺物は覆土中及びカマド脇から出土し、土師器坏・甕・長胴甕・須恵器蓋杯が見られる。土師器坏（図11-3）は、半球形の杯で、口縁端部は直立気味にやや内傾する。内面にはミガキがみられる。2の坏は内面が黒色処理されており、底部は器台状に作出されている。1は口径が24cm程度の大形の杯で、口縁端部が内湾する。内面は黒色処理されている。須恵器蓋杯は蓋が1点、身が2点出土しているが、いずれも1/10程度の残存部である。10は、口縁部の立ち上がりが内傾する。また不明鉄製品が2点（11・12）出土している。住居址ほぼ中央からは編物石が7点まとまった状態で確認されている。編物石は最小のもので長さ11cm・重量120g、最大のもので長さ18cm・重量828gと幅があり、平均すると長さ13cm・重量400gである。

⑤ 住居址25（SB 25）（図1・10　写真図版2）

AC10グリットを中心に検出された。西側は調査区外へ広がり、北側は住居址24に切られる。このため平面形や規模は不明である。検出面からの掘り込みは浅く、9cm程度である。貼床が全面に見られ、堅く締められている。柱穴はP1～P4まで検出したが、配置が不規則なため主柱穴は特定できない。また、カマド等は確認されなかった。

遺物は覆土中に少量見られ、土師器甕底部（図10-10・11）・高坏（9）・須恵器蓋杯（12）がみられる。須恵器蓋杯は身が2点見られるが、実測可能な2点のみ図示した。口縁部の立ち上がりは内傾し、底部は平坦となる。また、P2からは弥生時代の磨製石鏃が出土している。この他、床面上に編物石が4点見られた。編物石の平均は長さ16cm・重量750gである。

⑥ 住居址26（SB 26）（図2）

AE09グリットを中心に検出された。東側で住居址25に切られているため住居址の北隅周辺が確認されたのみであり、平面形や規模は不明である。検出面からの掘り込みは浅く、6cm程度である。残存部の床面は全体的に軟弱で不明瞭である。柱穴等の施設は検出されなかった。

遺物は覆土中に少量見られたのみで、図示できるものはない。

⑦ 住居址27（SB 27）（図2）

AE09グリットを中心に検出された。北側隅が確認されたのみで、平面形・規模等は不明である。

西側は調査区外に広がり、東側は住居址26に接する。住居址26との新旧関係は不明瞭で、床面の高さもほぼ同一である。床面は軟弱・不明瞭で柱穴等の施設も検出されていない。本住居址は周辺の住居址との位置関係から、住居址25の北壁付近の可能性も指摘できる。

遺物は土師器片が1点のみ出土した。

(2) 溝址・小柱穴

① 溝址12(SD 12)(図12・15・18　写真図版7・14・21)

AL13グリットを中心に検出された。西側は調査区外に連続し、西側は撹乱により破壊されている。住居址21と重複関係にあり、これに切られている。調査区内での全長は15.0mで、最大幅は6.6m、深さ0.4mである。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦で、覆土は壌質砂土が主体となる。溝址の中程で北側に曲がる箇所も見られることから方形周溝墓の一部の可能性もある。

遺構の底面が第二検出面まで掘りこまれているため、縄文時代前期後半・弥生時代中期前半～後期と多時期にわたる遺物が出土しているが、主体は弥生時代中期後半であり、古墳時代の遺物は見られない。また、硬砂岩製の有肩扇状形石器、磨製石鏃未製品も出土している。

② 溝址13(SD 13)(図7・15・19　写真図版6・15)

AK11グリットを中心に検出された。西側は調査区外に連続し、東側が撹乱で破壊されている。溝址14と重複するが、前後関係は不明である。調査区内での全長は7.7mで、最大幅は2.5m、深さは0.4mである。断面形は逆台形を呈し、底面は部分的に凹凸が見られる。覆土は壌質砂土が主体となることから自然流路と推定される。

遺構の底面が第二検出面を掘り込んでいるため、縄文～古墳時代にかけての遺物が出土している。弥生時代の遺物としては甕・壺等が見られるが、いずれも小破片である。古墳時代の遺物は土師器甕・台付甕が見られる。また、縄文時代の小型石棒の頭部(図19-3)や弥生時代の有肩扇状形石器・有抉石器なども出土している。

③ 溝址14(SD 14)(図7)

AJ10グリットを中心に検出された。西側が調査区外へ連続し、北側で溝址13と重複する。調査区内での全長は1.9mで最大幅は0.3m、断面形は逆台形で、深さは0.25mと浅く底面は平坦である。

遺物は出土していない。

④ 溝址15(SD 15)(図7)

AI10グリットを中心に検出された。西側が調査区外へ連続し、北側に溝址14が近接する。調査区内での全長は0.9mで、最大幅は0.3m、断面形は逆台形で、深さは0.28mと浅い。規模・覆土等の点で溝址14と近似しており、同一の溝址の可能性がある。

遺物は出土していない。

⑤ **溝址 16**（SD 16）（図 7・16・17　写真図版 6）

AI11 グリットを中心に検出された。西側が調査区外に連続し、北側にSD 15 が近接する。調査区内での全長は 11.0 m で、最大幅は 1.42 m、深さは 0.37 m である。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。他の溝址と同様に、第二検出面まで掘りこまれているため、遺物は弥生時代中期後半～後期の土器片が主体となる。また、縄文時代の土製耳飾（図 17-27）も出土している。

⑥ **小柱穴**

調査区全域から小柱穴が 11 基検出された。形状は円形もしくは楕円形が多い。深さは 10 ～ 40 cm と幅がある。規則的な配置も見られず、遺物も極少量で、性格は不明である。

4　奈良～平安時代の住居址

① **住居址 23**（SB 23）（図 10）

AF13 グリットを中心に検出された。貼床の一部が確認されたのみで平面形・規模等は不明である。貼床の状況から住居址 22・24 より新しいと考えられる。

遺物は貼床下から土師器長胴甕（図 10-4）・高坏（5）、須恵器蓋杯（6・7）が出土している。高坏は脚部のみで、円柱状の脚部である。須恵器蓋杯は蓋が 2 点出土しており、いずれもつまみが剥落した痕跡を残す。7 は端部断面が三角形となる。

5　遺構外出土遺物（図 17・19　写真図版 17・21）

今次調査では、各検出面ともに遺構外から各時期にわたる遺物が出土しているが、遺物量は少なく、破片が多い。時期的には縄文時代前期末葉～中期初頭、弥生時代中期後半、古墳時代の遺物が見られる。（図 17-5 ～ 7）は、半隆起線によって描かれた区画文が施された土器。小破片のため全体のモチーフは不明であるが、縄文時代前期末～中期初頭と推定される。石器には打製石包丁・磨製石鏃未製品等が出土している。

第Ⅳ章　総　括

今次調査は、店舗建設予定地という極狭い範囲に限られたもので、遺跡全体からするとそのごく一部に試掘坑をあけた程度のものといえる。しかしその調査結果は本文中に記したとおりであり、過去2次に亘る調査成果と合わせ、本遺跡の実体に深く迫るものとなった。特に、今次調査では、飯伊地域に類例の少ない弥生時代中期後半～中期終末の住居址が9軒確認され、当該期における一定規模の集落の存在が確認された意義は大きい。また、遺物量は少ないながらも、不明瞭であった当該期の土器様相の一端を示すものと言え、重要な成果と考えられる。このためここでは、今次調査区で確認された弥生時代中期後半の土器についてふれ、今次調査成果の到達点と課題について時代毎に概観し、総括としたい。

1　弥生時代中期の土器について

主に第二検出面から出土しており、第一検出面の溝址からも確認されている。遺跡全体から出土した器種は、壷・甕・高坏もしくは器台であるが、器形の全体が判別できる資料は少なく、住居址の炉に転用された土器がほとんどである。このうち、比較的良好な資料がみられる住居址29・30・34の出土遺物を中心に観察したい。

(1) 住居址29 (図12)

器種には壷・甕がみられる。壷(図12-1)は胴部のみであるが、胴部の中央付近に最大径のある球形を呈する。胴部上半に櫛描横線文を施し、下部に櫛描連続山形文を施文後、中に櫛描短線文を交互に充填している。いずれの櫛描文も断面中空の竹管状工具を6ないし7本束ね使用している。山形文は時計回りに施文され、起点と終点が一致していない。このため、山形文の区画内に充填される短線文が連続してしまう箇所もみられる。山形文の各頂点にはボタン状貼付文が施されている。残存する下半部には刷毛による調整痕が見られ、内面には長石粒が顕著に観察される。4は壷の胴上半部の小片である。単沈線による区画内に櫛描文が施されている。甕(2)は頸部付近の破片である。櫛描横線文もしくは廉状文が施されている。

(2) 住居址30 (図10)

器種には壷・甕がみられる。壷(図10-16)は頸部以上を欠く胴上半部である。頸部に櫛描山形文を施し、山形文の谷部を区画とし内部に櫛描短線文を充填するが、単位の誤りから区画の山部内に充填する箇所も見られる。連続櫛描山形文の下部には櫛描横線文・櫛描廉状文が施文されている。いずれの櫛描文も断面中空の竹管状工具を8ないし9本束ね使用し、時計回りに施文している。施文順序は櫛描横線文→山形文→単線文充填と考えられるが、山形文と廉状文の前後関係は不明である。器面には雨垂れ状にススが付着し、胴下半には刷毛による調整痕が見られ、内面には5㎜以上の長石粒が顕著に観察される。甕は口縁部と胴部片が出土している。17は口唇部外面に櫛状工具による刻みが見られる。18は櫛描横線文もしくは廉状文が施されると推定される。

(3) 住居址 34 (図13)

器種には壷・甕・鉢がみられる。図13-5・6は壷の口縁部～頸部付近の破片である。いずれも赤色塗彩が僅かに残存する。この内5は受口状の口縁部と推定され、口縁部に縄文が施文されている。12は炉に転用された甕である。口縁部と底部を欠き、頸部には櫛描波状文が見られ、胴部には同一工具による櫛描羽状条線文が施されている。1はほぼ完形の甕である。口縁部は受口状にやや内湾し、胴部の上半に張りを有する。大ぶりの底部には木葉痕がみられる。文様は、口唇部に櫛状工具の先端部による刺突が加えられ、受口状の口縁部には乱れた櫛描波状文が2段見られ、頸部には櫛描廉状文、胴部上半に櫛描山形文、胴部に櫛描波状文と短線文が施文されている。内外面には刷毛による調整痕が見られる箇所もある。11は甕の頸部付近の破片である。6本一単位の櫛描波状文が3～4段施され、肩部には櫛描条線により山形文が施文されると推定される。山形文の接点にはボタン状の貼り付けが見られる。

(4) 編年的位置

今次調査区第二検出面の住居址群は、他遺構との切り合いや、後世の攪乱により全ての遺構で良好な資料が検出されたわけではない。上記の3軒の住居址にしても、当該期の器種組成をすべて示していない可能性が高い。このような不十分な状態であるものの、同様な土器群が検出された恒川遺跡群の報告(飯田市教委 1986)を参考に、その編年的な位置付けを模索したい。

恒川遺跡群では弥生時代中期を恒川Ⅰ～Ⅲ期に設定している。型式学的な関係は、恒川Ⅰ・Ⅱ期が弥生時代中期後半の北原式、恒川Ⅲ期が中期終末の恒川式にそれぞれ比定されている。上記3軒の資料を対比させると、SB 29は恒川Ⅲ期とされたGOB47号住居址に近似する壷がみられ、SB 30の壷は恒川Ⅱ期の文様施文の特徴とされる頸部～胴部の3段施文が崩れた段階と推定される。また、SB 34の甕(図13-12)は、頸部の波状文と胴部の羽状条線文の存在から、恒川Ⅱ期とされたARY51号住居址の甕に近似している。この他、SB 34からは、受口状にやや内湾し、胴上部に張りを持ち最大径が口縁部径とほぼ同一な甕(1)がみられる。文様構成は壷の頸部～胴部上半の文様構成をそのまま甕に使用する特徴がある。また、受口状の口縁部をもち、縄文施文される壷が存在する。以上の点から第二検出面の住居址の多くは恒川Ⅱ～Ⅲ期にほぼ併行すると考えられる。

2 各時代の様相

ここでは今次調査の成果と過去2次にわたる調査および隣接する国道バイパス建設時の調査成果をもとに、藪越遺跡の時代毎の変遷についてふれてみたい。

(1) 縄文時代

過去の調査も含め、第二検出面を中心に、縄文時代前期終末～中期初頭、中期後葉～後期の遺構・遺物が出土しているが、遺物量は極めて少なく小破片が多い。また、明確な遺構はⅡ次調査時に確認された中期終末～後期の土壙墓のみであるが、今次調査区からも土製耳飾や小型の石棒が出土しており、周辺に墓域あるいは祭祀的な遺構の集中する箇所が存在すると考えられる。

(2) 弥生時代

第二検出面から中期後半～後期終末までの遺構・遺物が見られる。今次調査区ではヘラ描単沈線による施文が見られる北原式も出土しているが、量は少なく遺構も確認されていない。今次調査区の主体は北原式後半～恒川式で、遺構は住居址や溝址が検出されている。住居址の形態は、後世の撹乱により詳細が不明な部分が多いが、凡そ長方形に近い形状と推定される。炉址は盛あるいは甕を転用した土器埋設炉が主体となり、多くの住居址で重複が認められ、多時期に亘る遺物がみられることから、中期後半を通じ、一定規模の集落が展開していたと考えられる。集落の範囲は、Ⅰ・Ⅱ次調査区では当該期の遺構が確認されていないことから、遺跡南側の栗沢川沿いの東西方向に展開していたと推定される。

弥生時代後期になると今次調査区からは住居址が1軒検出されたのみであるのに対し、Ⅰ・Ⅱ次調査区では合計15軒検出されている。時期的には後期前半が2軒で、主体は後期終末の中島式期である。いずれの住居址も主軸はほぼ同一で、Ⅰ次調査区を中心に住居址の重複が多くなる傾向にある。また、Ⅱ次調査区の住居址群からやや離れた北側箇所で掘立柱建物址が3棟検出されており、集落の北端を示す可能性がある。こうしたことから、後期になると今次調査区の北側の湿地帯を眼前に控えた箇所へと集落が移動したと推定される。集落の形態も、北側湿地帯を生産基盤とする大規模な集落へ変貌したと考えられよう。

一方、今次調査区から栗沢川を挟んで南側の宮垣外・高屋遺跡からは弥生時代の方形周溝墓が検出されている。当該期の集落は確認されていないことから弥生時代から古墳時代の墓域と推定されている遺跡群である。今次調査区からは南へ約400 mとやや離れた箇所に存在するものの、墓の被葬者と藪越遺跡集落との間に何らかの関係があったことも推定される。

(3) 古墳時代

Ⅰ次調査で住居址3軒・溝址、今次調査で住居址8軒などが検出されている。いずれの住居址もカマドを有し、出土遺物からは6世紀代と推定される。Ⅰ次調査では調査区が集落の北端と推定されており、今次調査区は、撹乱により詳細は不明であるが、西側中心に遺構が確認されている。このため集落は今次調査区西側の段丘崖に向かい栗沢川に沿って広がると推定される。一方、前述の宮垣外・高屋遺跡との関係は、古墳・周溝墓・土壙墓が5世紀代に築造されている点から直接の接点は見出せないものの、Ⅰ次調査区からは5世紀代の遺物を多量に出土した溝址が検出されており、周辺に当該期の集落が存在する可能性がある。一方、遺跡の西南に所在する飯沼天神塚古墳を中心に、化石1・2号墳など横穴式石室を有し、古墳時代後期と推定される古墳群も近接しており、こうした古墳群成立の母体となった集落の一つである可能性も考えられる。

(4) 奈良・平安時代

今次調査区から住居址1軒、Ⅰ次調査で溝址が1条確認されており、周辺に一定規模の集落が展開していたと推定される。上郷地区における当該期の大規模集落は、藪越遺跡の北東に位置する堂垣外遺跡やママ下遺跡であり、伊那郡衙比定地である座光寺地区の恒川遺跡群に至るまで、低位段丘上を中心に集落が連続して存在したと考えられる。また、こうした遺跡群は、伊那郡衙と深い関係にある集落の可能性を指摘できよう。

(5) 中世

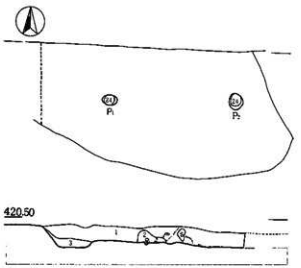
Ⅰ次調査において住居址が1軒確認されている。炭化米が多量に出土したことから米倉的な構築物で、一般的な住居とは性格を異にする。栗沢川を挟んで南側に隣接する高屋遺跡では、中世の方形竪穴や掘立柱建物址が多数確認されており、掘立柱建物址や方形竪穴によって構成される屋敷地の構築物群の一部である可能性が指摘できよう。

今次調査の結果は以上のとおりで、遺跡のごく一部を調査したにもかかわらず、前回の調査区と合わせて、いわば藪越遺跡を南北に横断する形の調査となった。このため遺跡内での時期別変遷を追うことが可能と思われる。この藪越遺跡では、縄文時代前期に生業活動の萌芽がみられ、縄文時代中期終末～後期初頭には集落の祭祀的な側面を持つ地域となり、弥生時代には中期後半から後期終末まで、集落域は異なるものの、拠点的な大集落を形成し、古墳時代に至るまで一貫して生活の拠点であったことが判明した。更に、藪越遺跡の人々は、南側に隣接する墳墓群を形成する一翼を担ったと推定される。奈良時代～中世においても集落として人々が関与した地域であったと言える。いずれにしても稲作が開始されて以来、高い生産力を備えた沖積段丘面に所在する藪越遺跡は、常に拠点的な集落の一つであったと推測されよう。こうした新知見を加えることのできた今次調査ではあるが、国道バイパス開通により周辺の開発が更に進むことが予想され、遺跡の破壊は必至と思われる。このため、今まで以上の文化財保護の本旨に沿った、弛まない努力こそ肝要である。

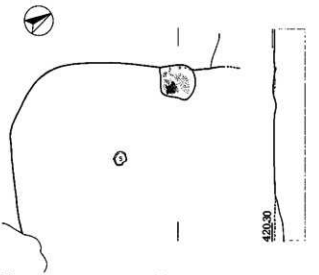
おわりに、発掘調査および報告書作成に当たり、埋蔵文化財保護に深い御理解を示し、惜しみない御協力をいただいた㈲まるやま、㈱しまむら、設計担当の㈱エム・ティ・プランの皆様に厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

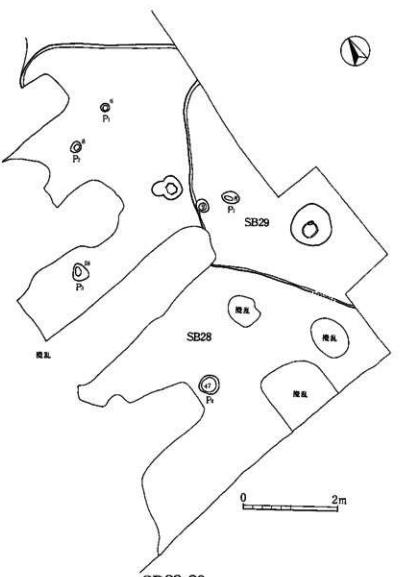
高森町教育委員会 1972 『北原遺跡』
飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』遺構編・遺物編
上郷町教育委員会 1991 『藪越遺跡』
飯田市教育委員会 2000 『藪越遺跡Ⅱ』
飯田市教育委員会 2000 『黒田大明神原遺跡Ⅲ』
飯田市教育委員会 2000 『宮垣外遺跡　高屋遺跡』



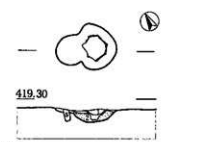
SB20



SB22

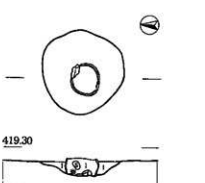


SB28·29



SB28炉
1層：10YR3/2黒褐色　炭化物混じりのシルト質埴土
2層：地土

SB28 炉

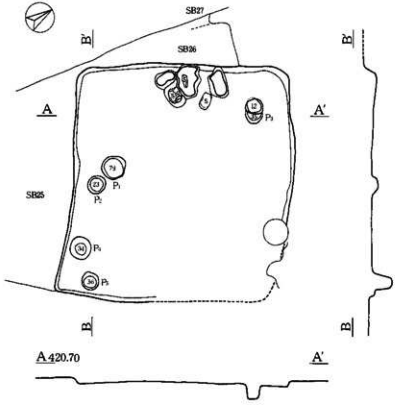


SB29炉
1層：10YR3/1黒褐色　炭化物混じりの粘埴土

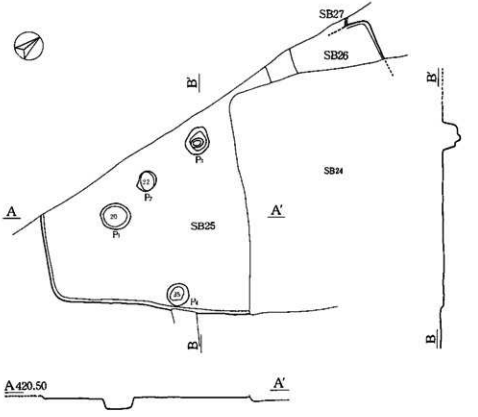
SB29 炉

0　1m

図1　住居址(SB20・22・28・29)



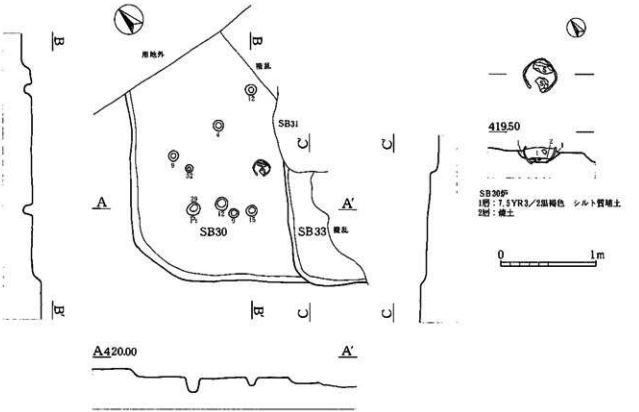
SB24



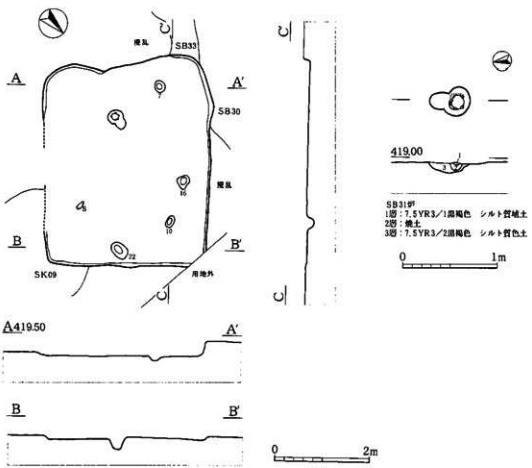
SB25·26·27

0 2m

図2 住居址(SB24～27)



SB30·33



SB31

図3　住居址(SB30・31・33)

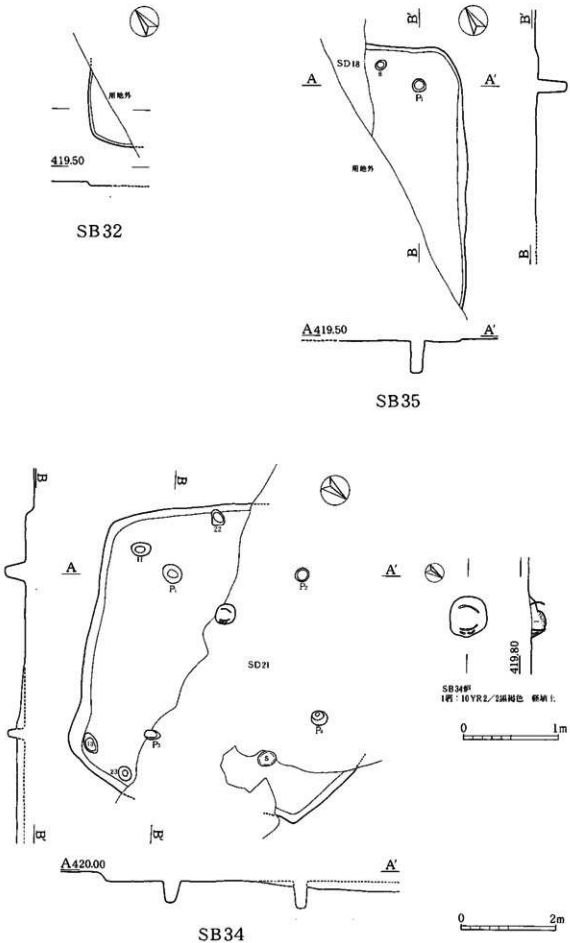


図4　住居址(SB32・34・35)

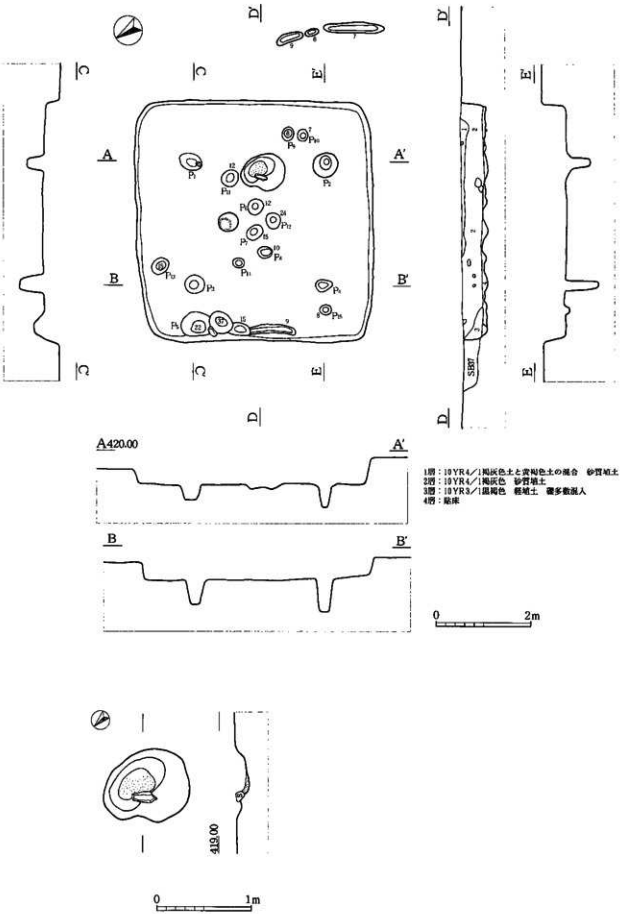

A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
A420.00
1層：10YR4/1褐灰色土と黄褐色土の混合　砂質埴土
2層：10YR4/1褐灰色　砂質埴土
3層：10YR3/1黒褐色　粘埴土　微多数混入
4層：粘土
0
2m
419.00
1m

図5　住居址(SB36)

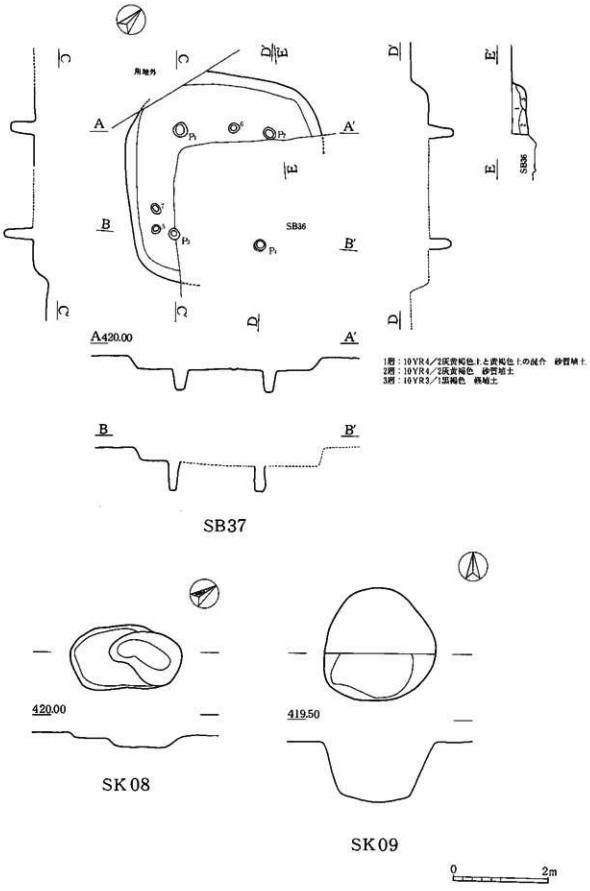


図6　住居址・土址(SB37・SK08・09)

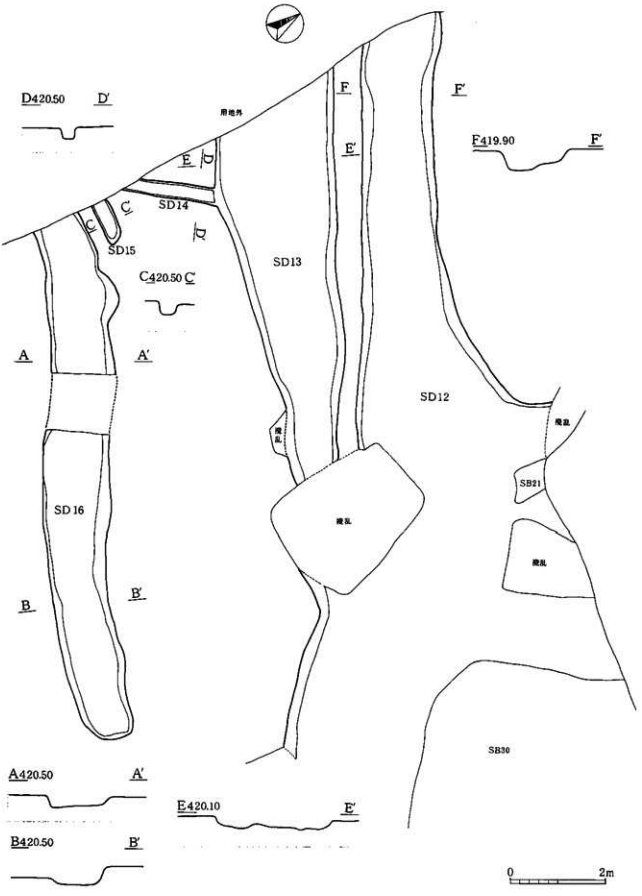

D420.50
D'
用地外
E
D
C
C'
SD14
SD15
C420.50 C'
A
A'
SD16
B
B'
A420.50
A'
B420.50
B'
SD13
F
E'
E420.10
E'
F'
F419.90
F'
SD12
撹乱
SB21
SB30
0
2m

図7 溝址(SD12～16)

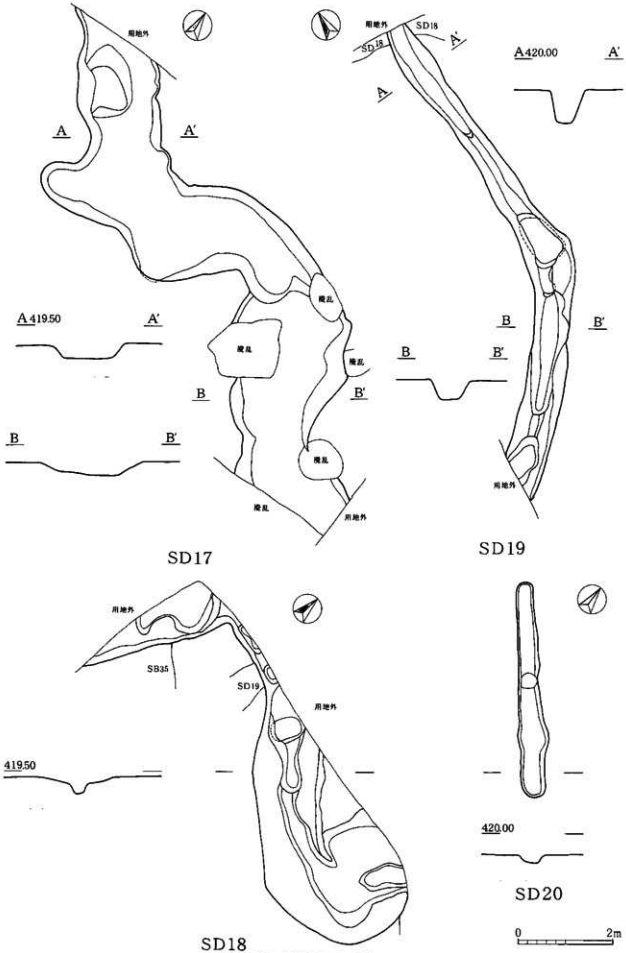

調査地外
A
A'
A 419.50
A'
B
B'
B
B'
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
調査地外
SD17
調査地外
SD18
SD19
A
A'
A 420.00
A'
B
B'
B
B'
調査地外
SD19
調査地外
SB35
SD19
調査地外
419.50
SD18
420.00
SD20
0
2m

図8　溝址(SD17～20)

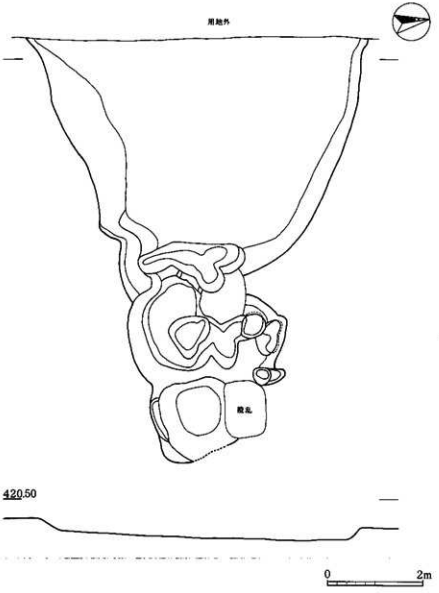


図9　溝址(SD21)

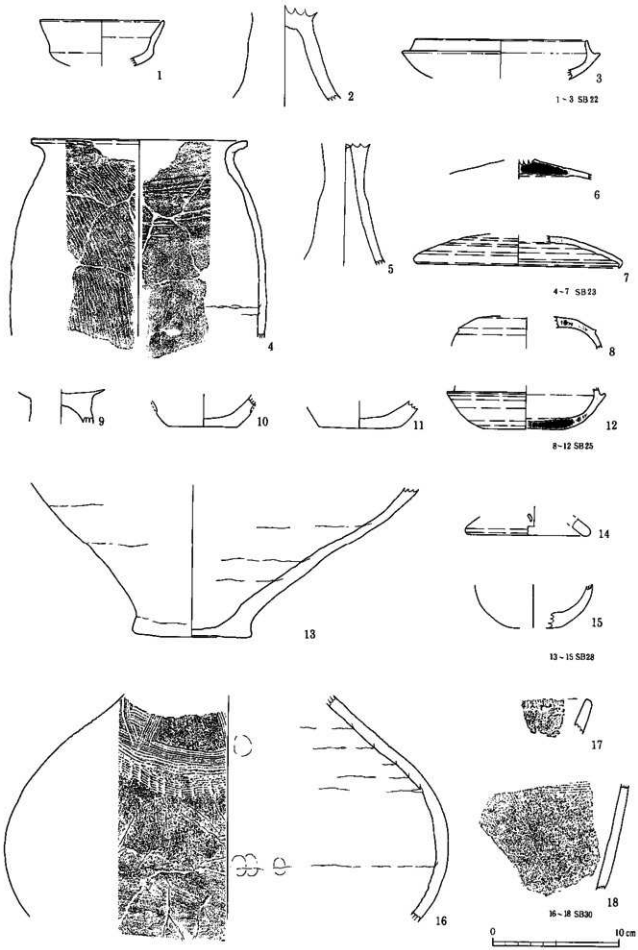


図10　住居址出土遺物(SB22・23・25・28・30)

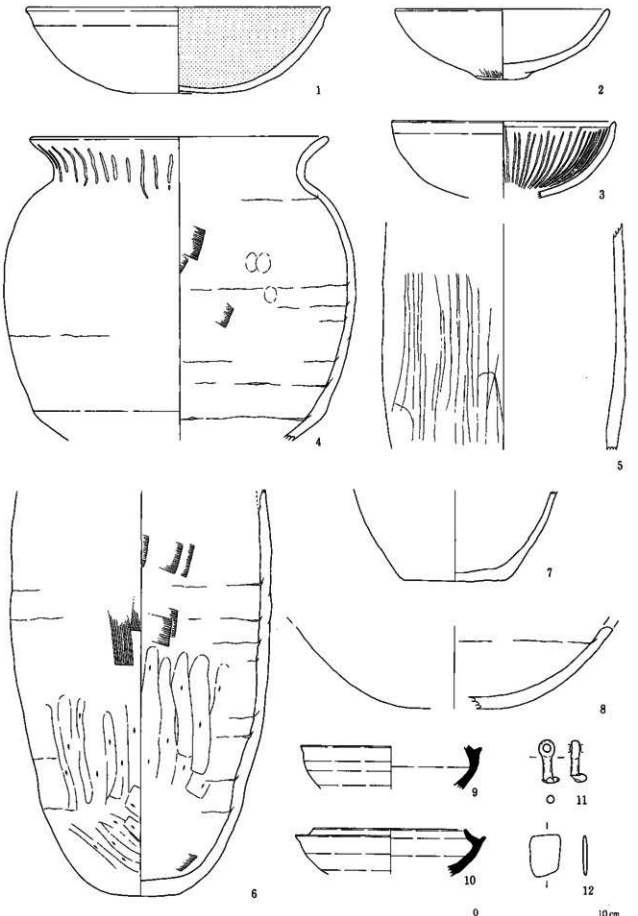


図11　住居址出土遺物(SB24)

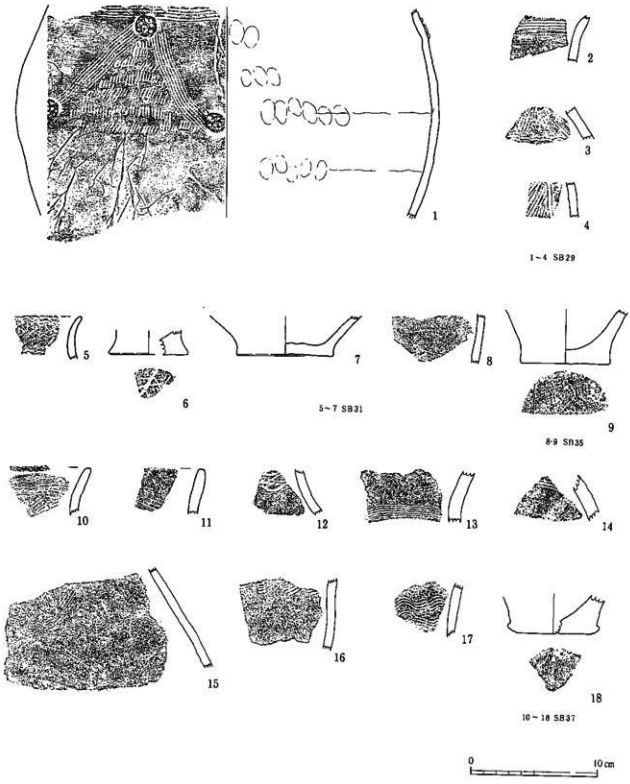


図12　住居址出土遺物(SB29・31・35・37)

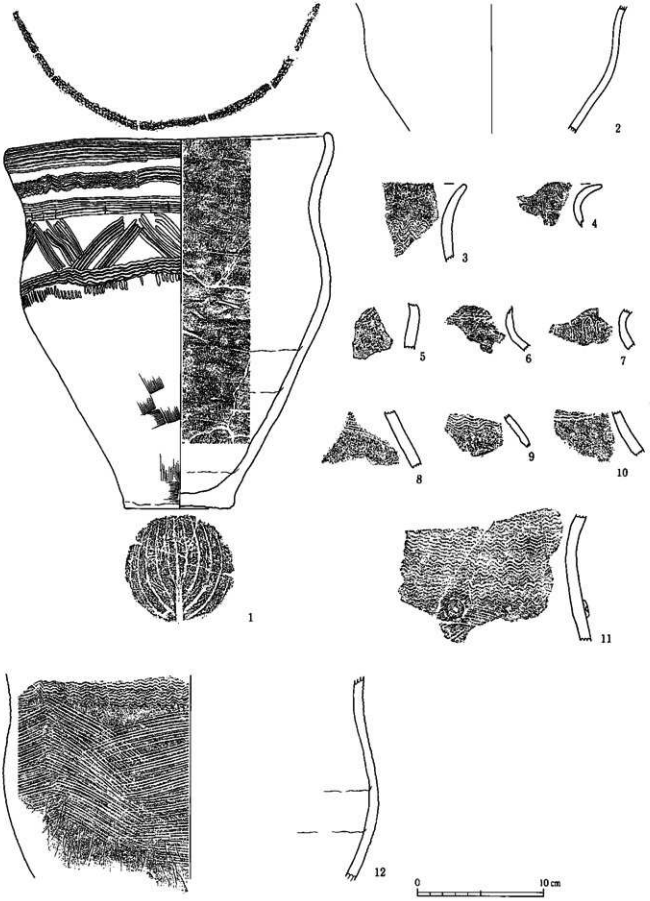


図13　住居址出土遺物(SB34)

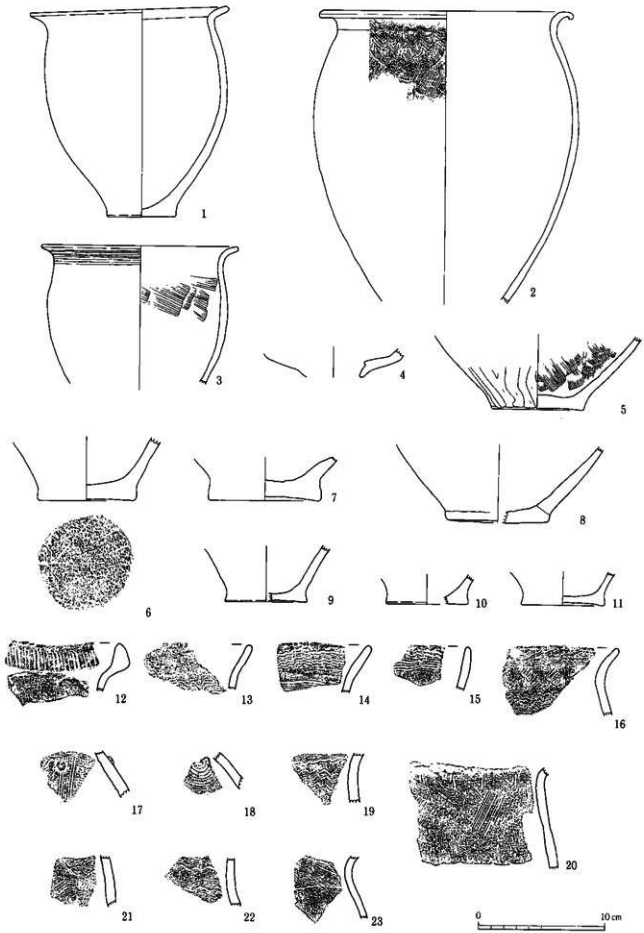


図14　住居址出土遺物(SB36)

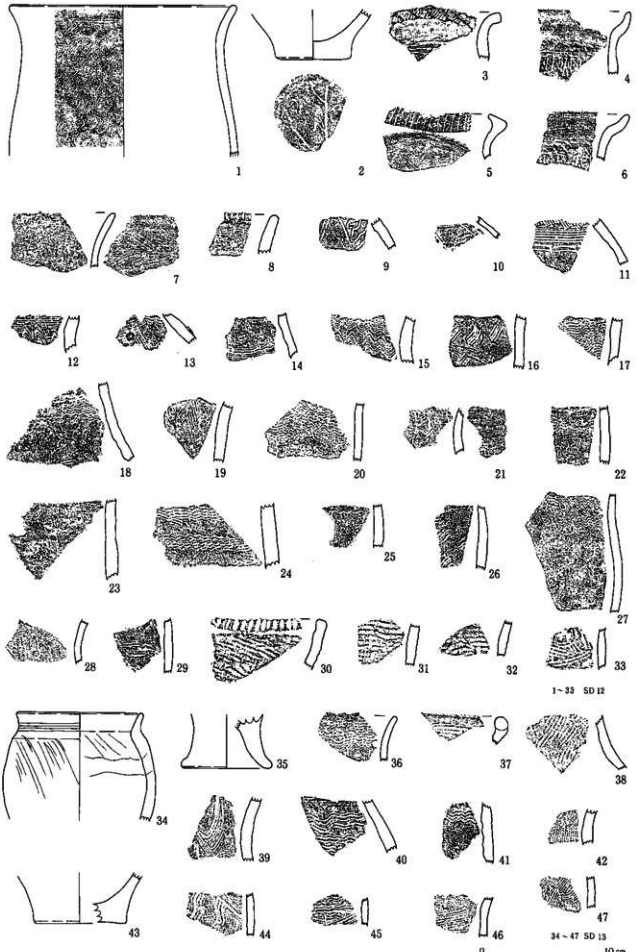


図15　溝址出土遺物(SD12・13)

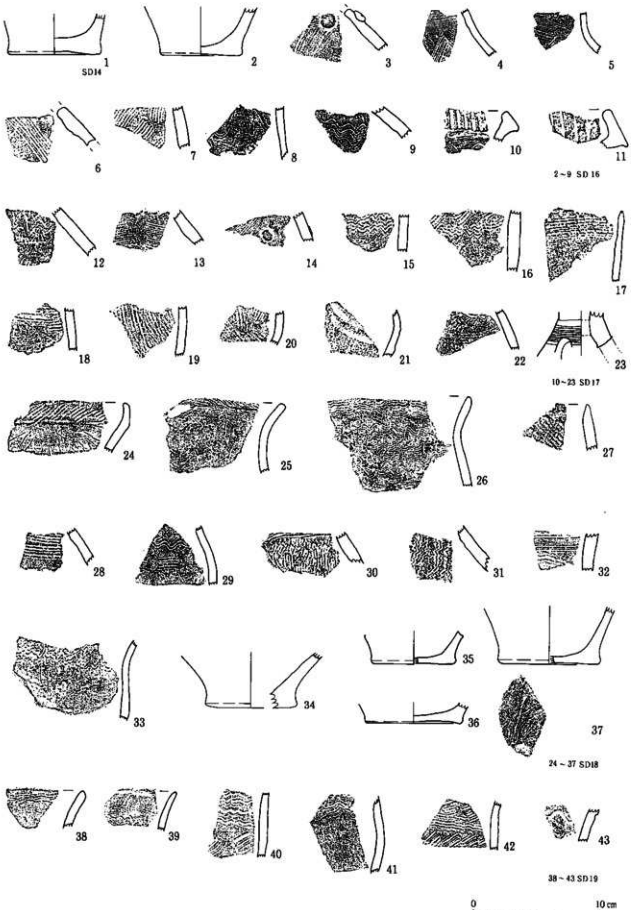


図16　溝址出土遺物(SD14・16～19)

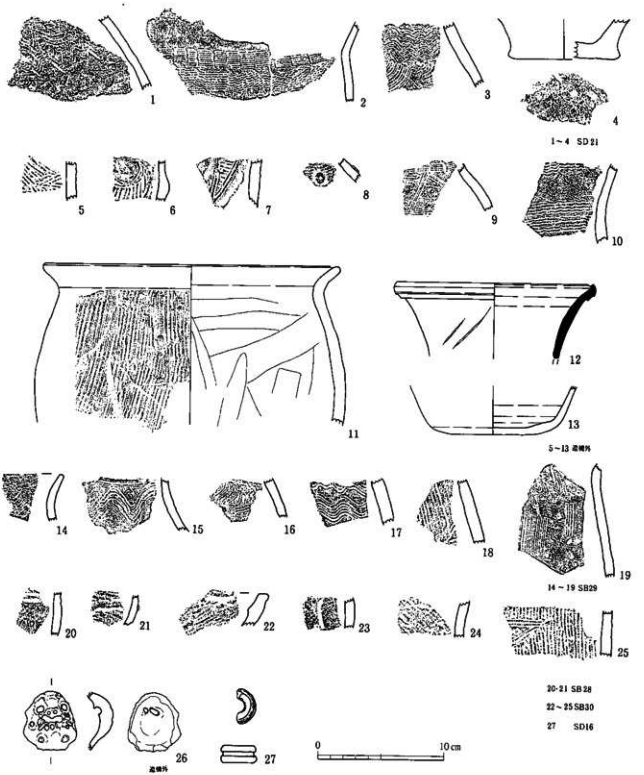


図17 住居址・溝址・遺構外出土遺物

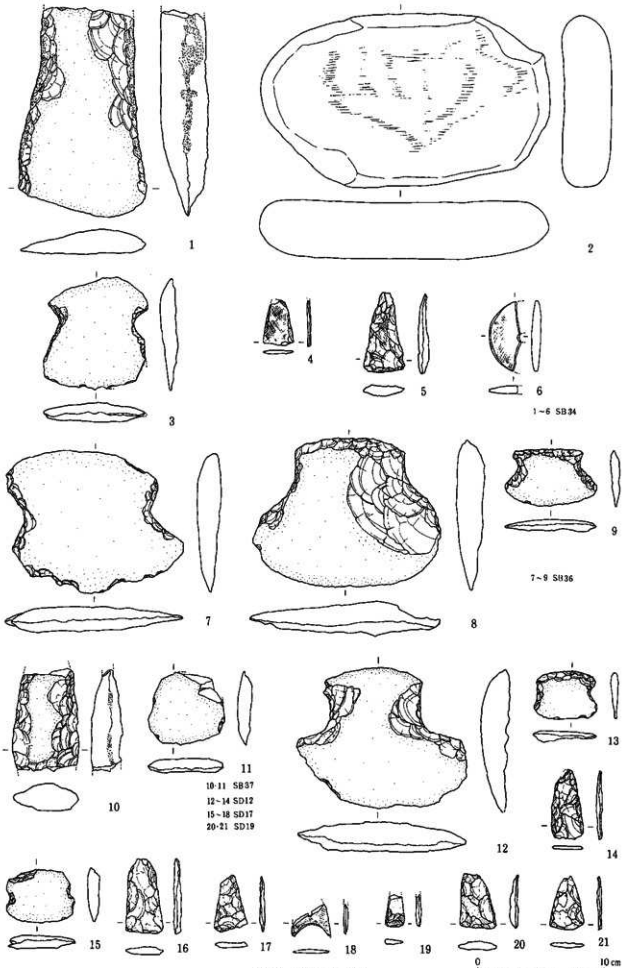

1
2
3
4
5
6
1~6 SB34
7
8
9
7~9 SB36
10
11
10·11 SB37
12~14 SD12
15~18 SD17
20·21 SD19
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
0
10cm

図18　遺構出土石器

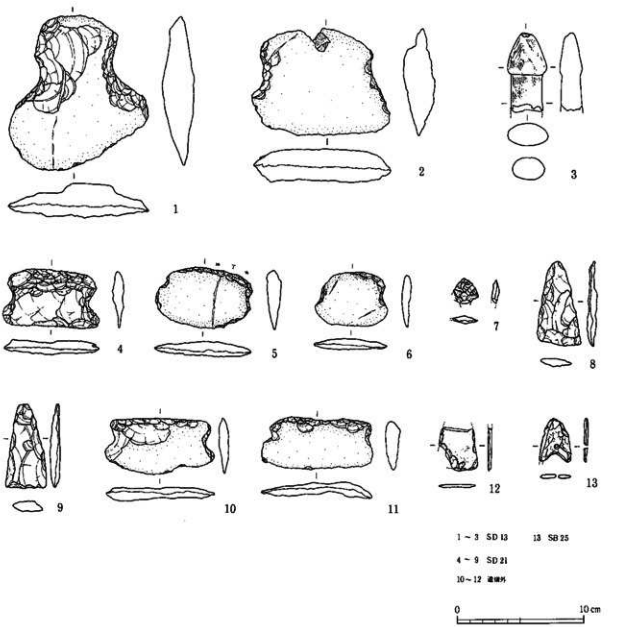


図19 遺構・遺構外出土石器

写 真 図 版

調査前全景（南から）

調査前全景（西から）

図版 2　遺跡

住居址22

住居址24・25

住居址30・31・33

住居址30炉址

住居址33炉址

図版 4　遺跡

住居址34

住居址34炉址

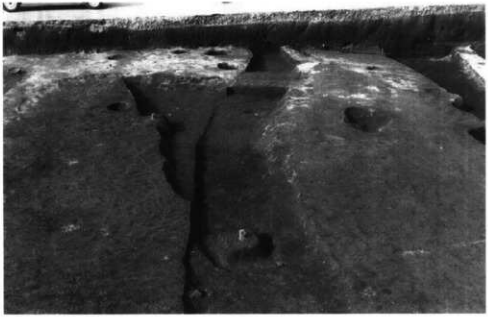
住居址36

住居址37

図版 6　遺跡

住居址35

溝址12・13



溝址16

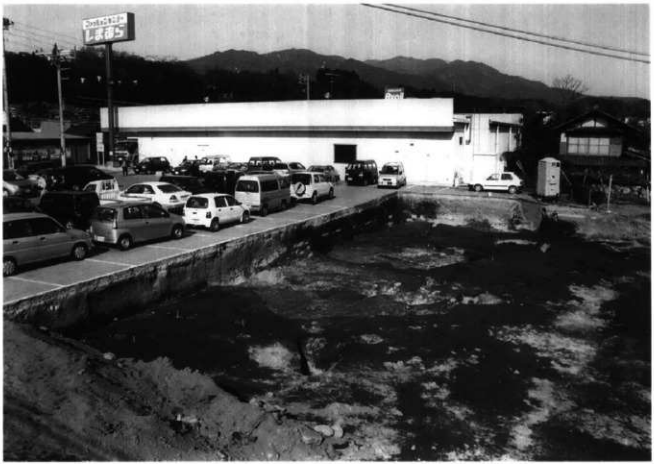
溝址17

溝址18

溝址19

第一検出面全景（1）

第一検出面全景（2）



第二検出面全景（1）

第二検出面全景（2）

図版10　遺跡

重機作業風景

委託測量風景

作業風景

住居址24

住居址30

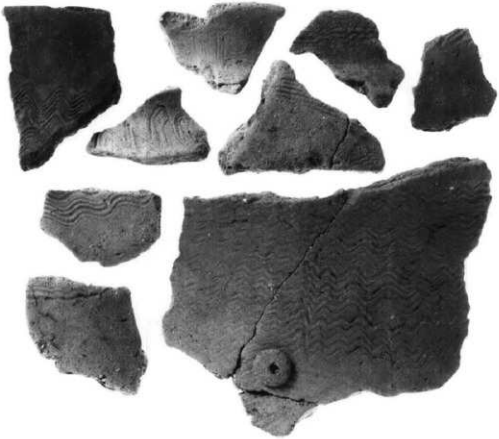
住居址24

住居址34

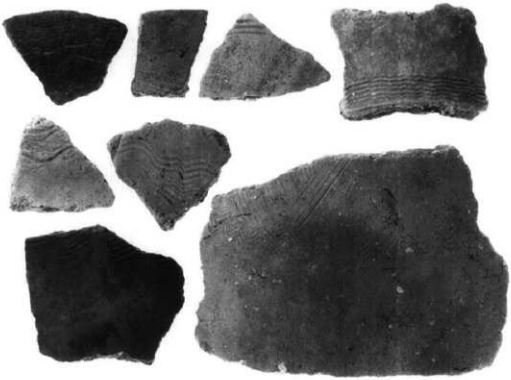
住居址28

住居址34

住居址29



住居址34

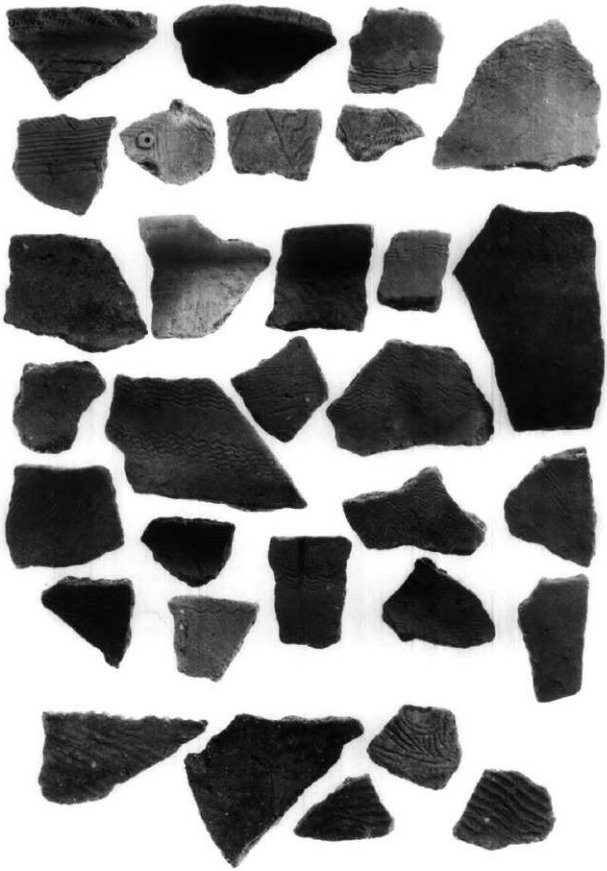


住居址37

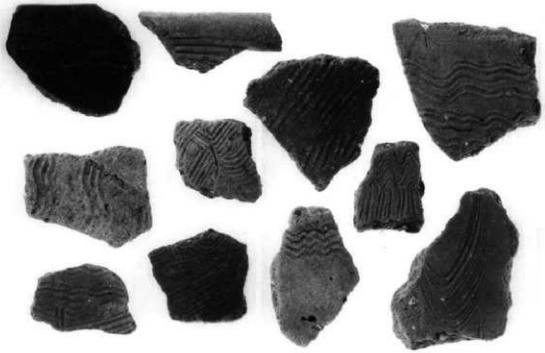
住居址36

住居址36

住居址36

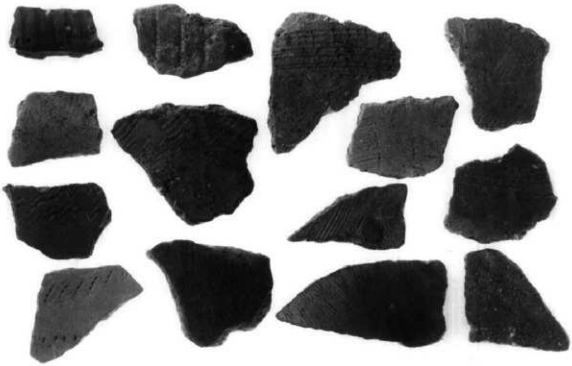


溝址12

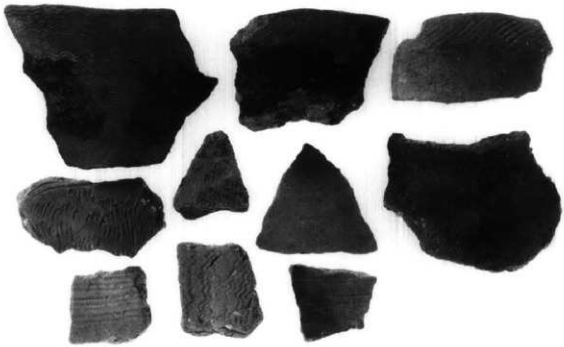


溝址13

溝址14



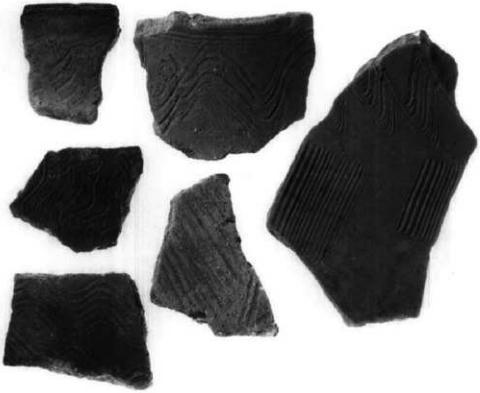
溝址17



溝址18

溝址19

道構外



住居址22

住居址30

炉に転用された甕・甕

図版20　遺物

住居址34

住居址36

溝址21

溝址17

溝址12・18・19・遺構外

遺跡出土磨製石鏃・磨製石鏃未製品

報告書抄録

ふりがな	やぶのこしいせき
書名	藪越遺跡Ⅲ
副書名	
巻次	
シリーズ名	
編著者名	下平博行
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395-8501　長野県飯田市大久保町2534番　TEL 0265-22-4511
発行年月日	西暦2005年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やぶのこし 藪越	いいだしかみさと 飯田市上郷	20205	35° 30′ 40″	137° 51′ 06″	平成15年 12月2日 から 平成16年 1月20日	1057㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藪越遺跡	集落	弥生時代中期 弥生時代後期 弥生時代 古墳時代後期 古墳時代 奈良平安時代	住居址9軒 住居址1軒 溝址5条 住居址7軒 溝址5条 住居址1軒	土器・石器 土器・石器 土器・石器 須恵器・土師器 土師器・須恵器 須恵器	飯伊地区でも類例の少ない弥生時代中期後半～後期にかけての集落址。

藪越遺跡 Ⅲ

2005年3月発行

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番
飯田市教育委員会
印　　刷　有限会社 発光堂